県営ほ場整備事業大田切地区（昭和45年度分）

第1次・第2次埋蔵文化財緊急発掘調査

藤助畑・春日

長野県駒ケ根市赤穂中割　藤助畑・中割原・春日・旧八幡社跡遺跡

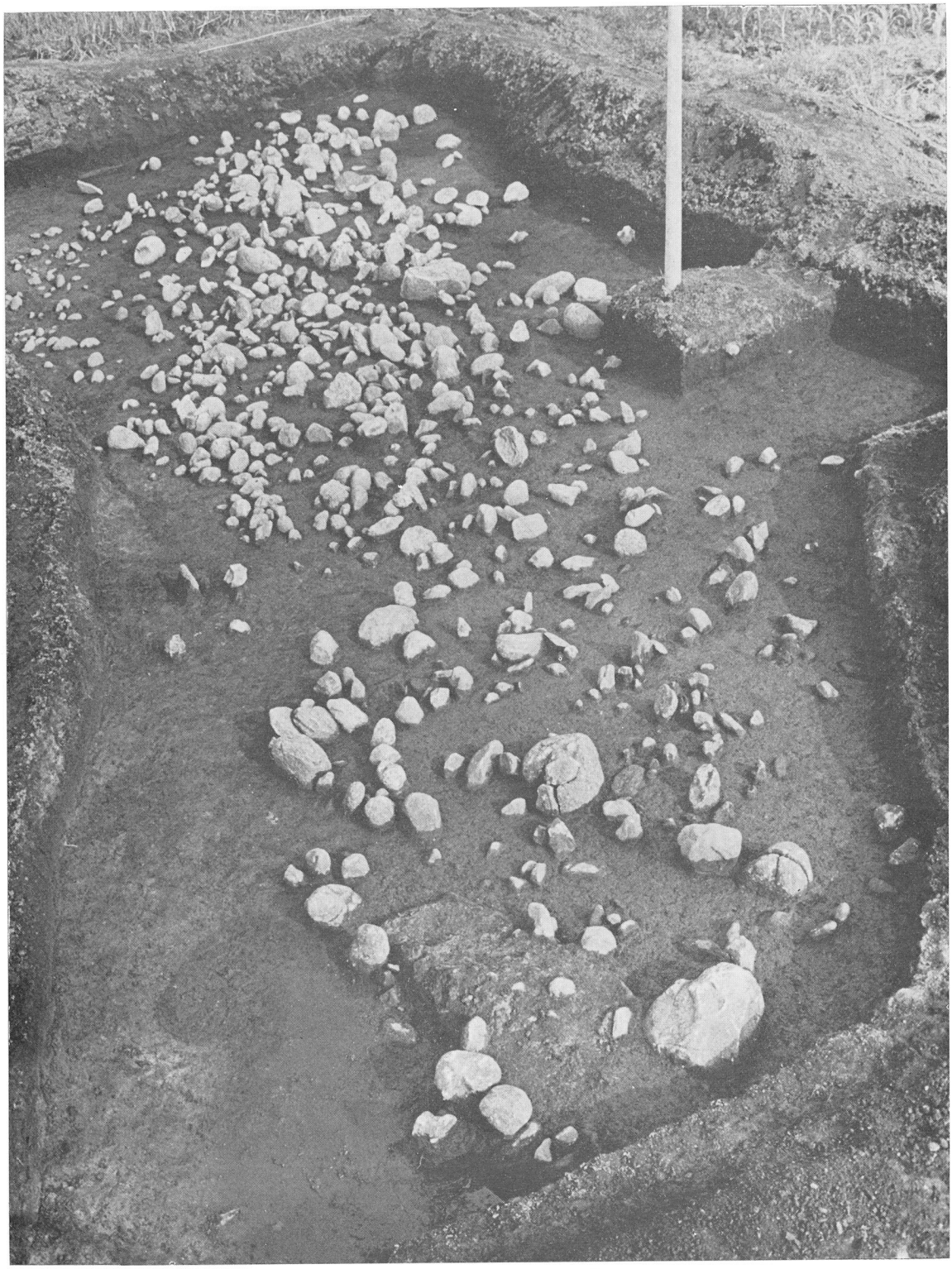
（縄文時代配石址・住居址）

——緊急発掘調査報告——

1971

駒ケ根市教育委員会

藤助畑・中割原・上穂沢遺跡



藤助畑配石址

序

駒ケ根市赤穂地区の農業構造改善事業としての大規模水田工事の進捗に伴って，急遽昭和45年7月に藤助畑，上穂沢等の遺跡，12月に春日，旧八幡社跡遺跡等を発掘調査しなければならないことになりました。

幸い，昭和25年から27年にかけて，大場磐雄先生ご指導のもとに，東伊那遺跡の調査を行った折，主任として当られた友野良一先生（上伊那考古学会会長，駒ケ根博物館学芸員）が健在でおられたので，調査団長をお願いしましたところ，ご快諾下さって発掘調査を進めてくださったわけです。

この調査は南信土地改良事務所からの委託によって行ったわけですが，友野団長を中心に考古学会会員の方々，換地工区役職員の方々のご協力，地元市民各位の奉仕的出動，調査を担当した市立博物館職員等多くの方々の熱意と実践によって，赤穂地区に点在する多くの遺跡調査の先鞭がつけられ，その報告書が出されたことを大いに喜び，関係者ご一同に深甚の敬意を捧げ，美田の下に埋もれている数多い先祖の住居址を偲ぶ好箇の資となることを願う次第です。

昭和46年3月10日

駒ケ根市教育委員会　教育長　　北　沢　照　司

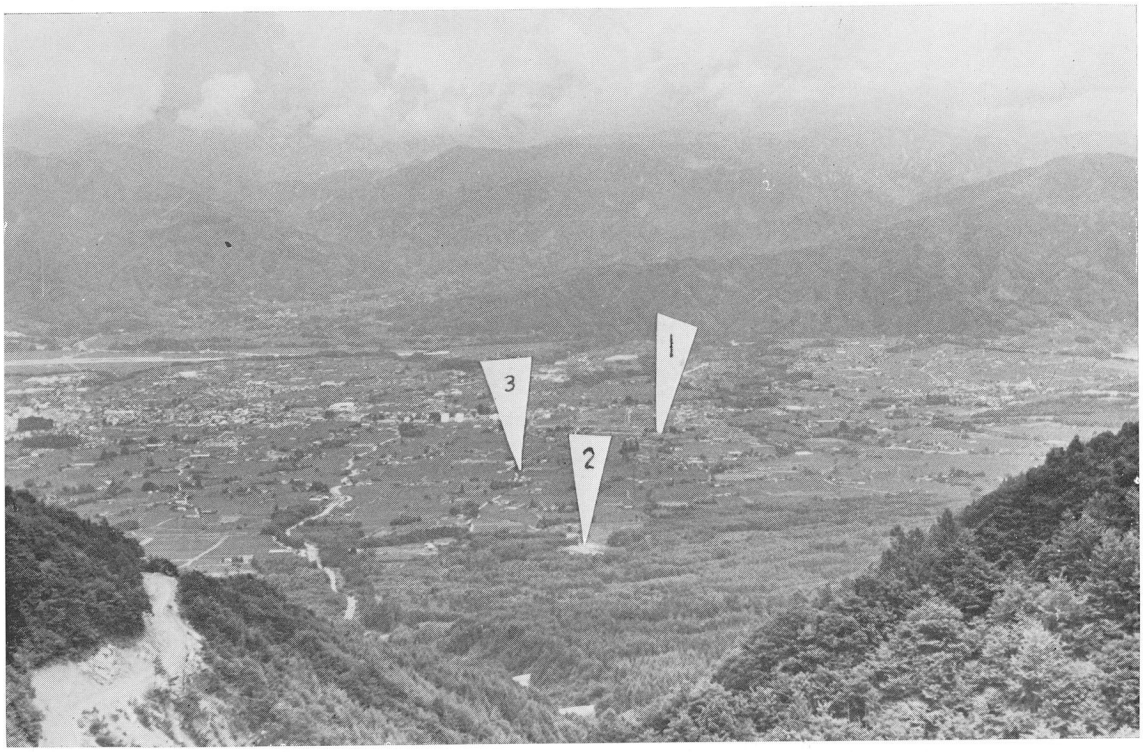
凡　　例

1．この調査は，農業構造改善事業による緊急の記録保存事業であるため，報告書は早急に刊行する義務が生じた。従って報告書は，図版を主にして，文章はなるべく簡略にした。

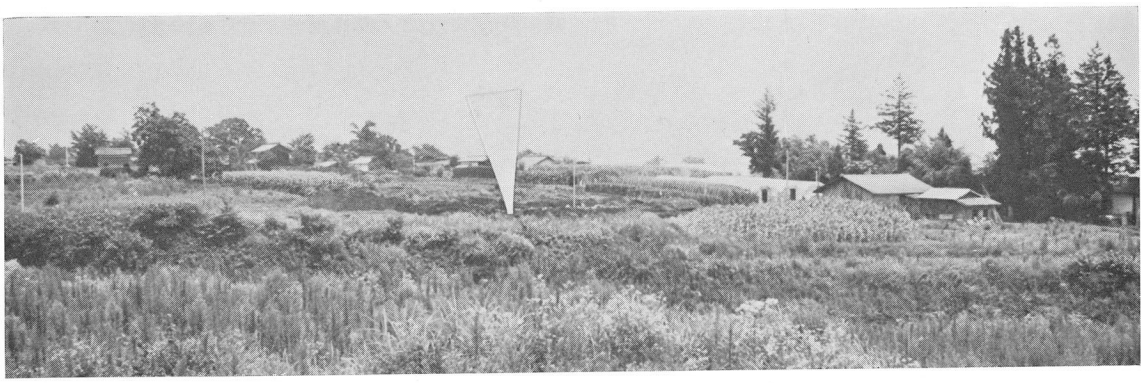
2．本調査は，ほ場整備工事に併行して実施されたため，調査の範囲は必要最小限度の地域にとどめざるを得なかった。従って本編集もこれに重点をおいた。また他の詳細については，本報告書刊行の機会を待ちたいのである。

3．この報告書の執筆及び図版の分担は，保存処置の経緯，調査の経過は（駒ケ根市博物館長小池金義）遺跡の環境（友野良一）遺跡，遺構（友野良一，木下平八郎，遮那藤麻呂），遺物，（遮那藤麻呂），まとめ，（友野良一）なお写真撮影は（木下平八郎）

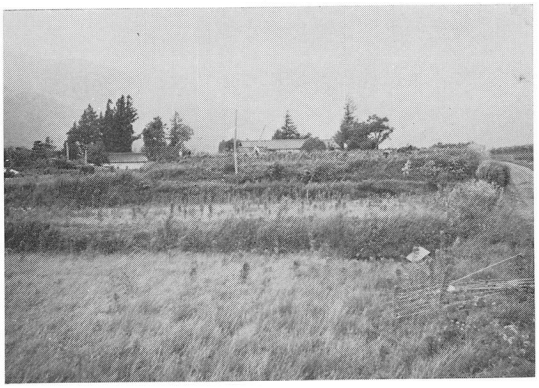
4．今後，駒ケ根市に於ては昭和45年度を皮切にほ場整備事業が活発に行なわれるに伴い，逐次報告を重ね，駒ケ根市教育委員会の文化財保護措置の有り方を明らかにすると共に，駒ケ根市に於ける原始，古代史の資料としたい。



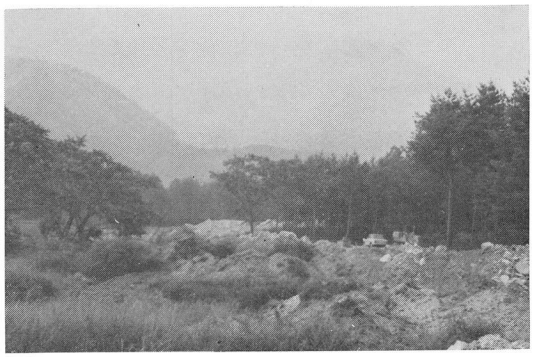
1



2



3



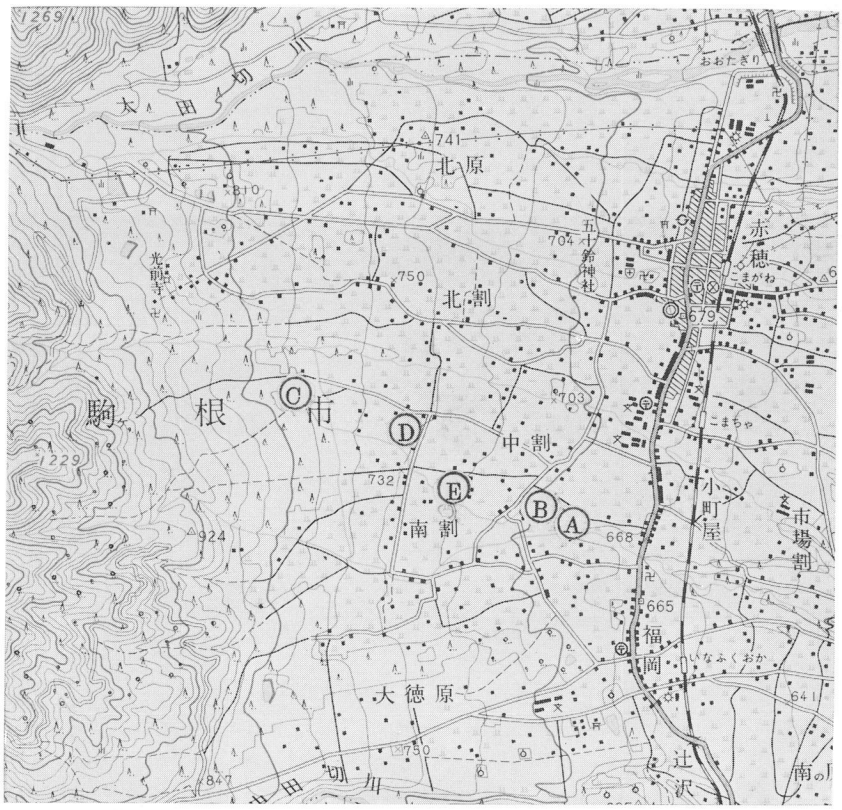
4

図版 1　遺　跡　地　形

1. 駒ケ根市の遠望（1.藤助畑遺跡，2.中割原遺跡，3.春日，旧八幡社跡遺跡）
2. 藤助畑南北より　　3. 上穂沢遺跡東方より
4. 中割原遺跡を南方より

1

2



3

図版 2　1．春日 A・B 遺跡，　2．旧八幡社跡遺跡，　3．地形図（駒ケ根市５万分の１）

A―藤助畑遺跡，B―上穂沢遺跡，C―中割原遺跡，D―春日遺跡，E―旧八幡社跡遺跡

目　　次

口　絵

序　文

凡　例

図　版　　p. 4～5

目　次　　p. 6

図　版　　p. 7～13

第Ⅰ章　遺跡の環境　　p. 14～15

第Ⅱ章　発掘調査の経過　　p. 16～18

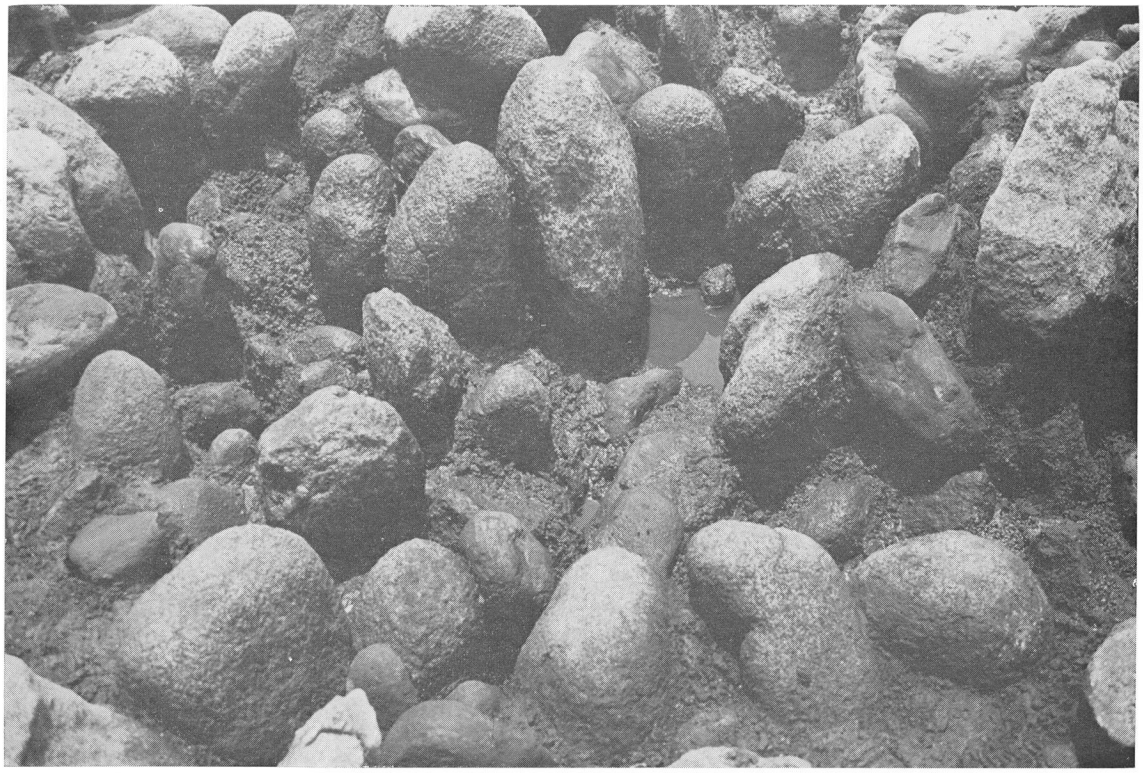
第Ⅲ章　遺　構　　p. 19～24

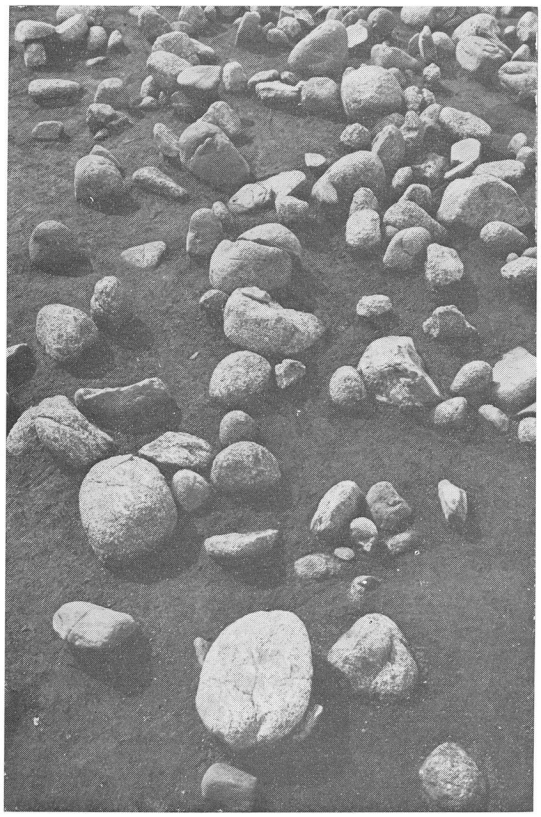
第Ⅳ章　遺　物　　p. 24～28

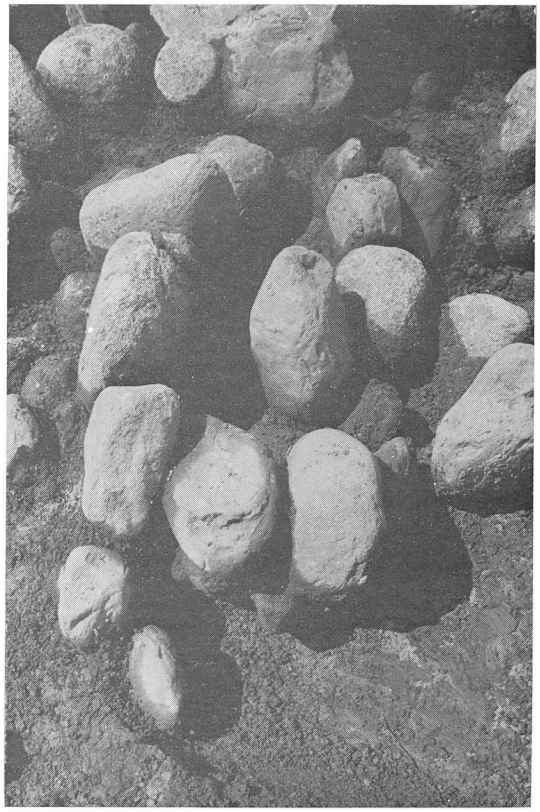
第Ⅴ章　まとめ　　p. 28～31

図版 3　藤助畑配石址出土状態

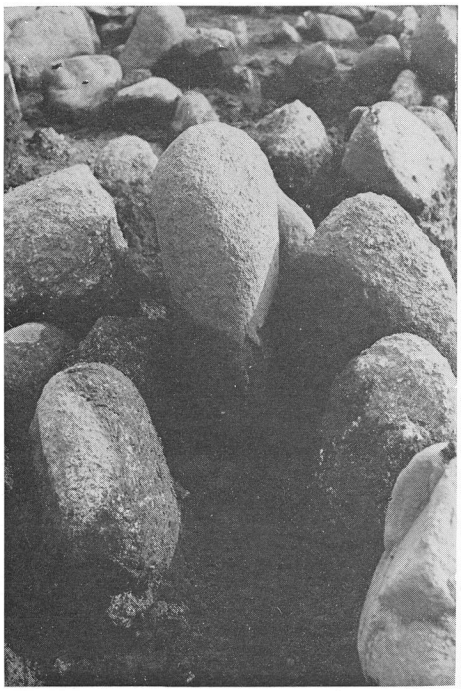
図版 4　藤助畑縄文時代配石址出土状況

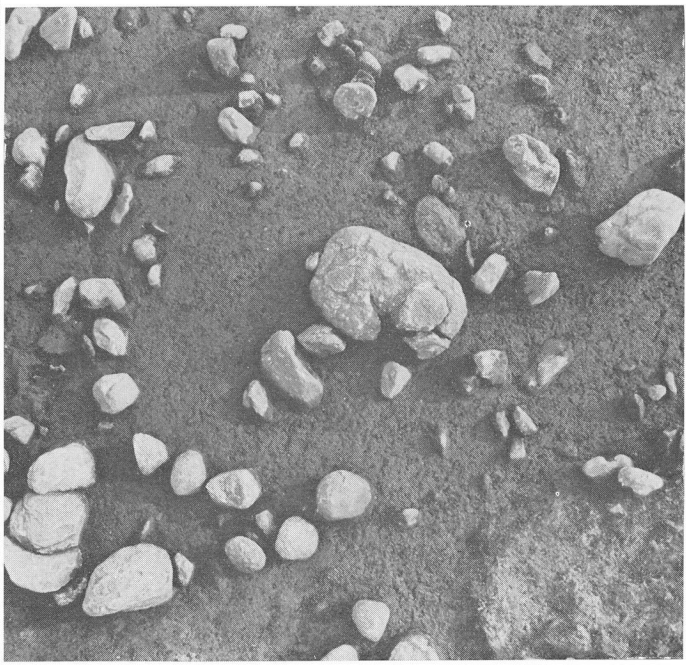




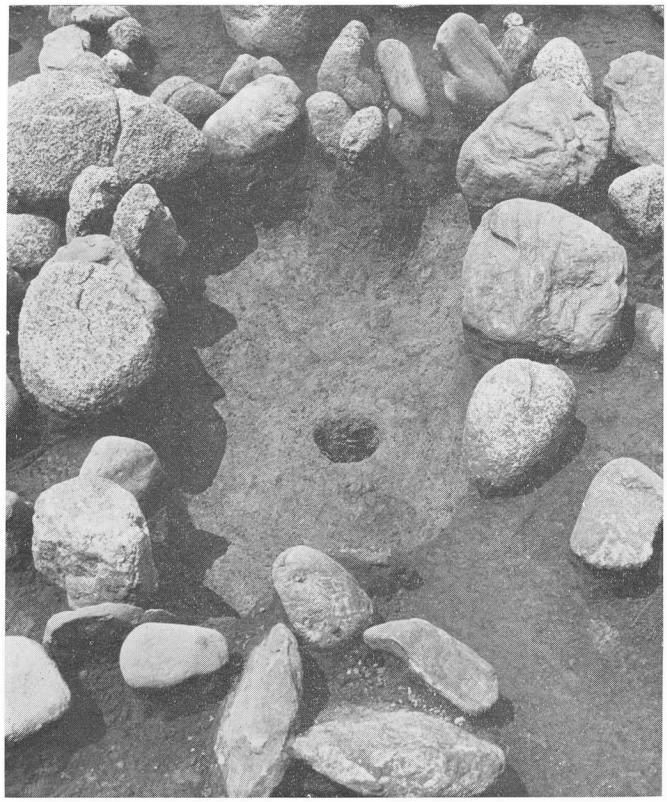


図版 5 藤助畑 配石址



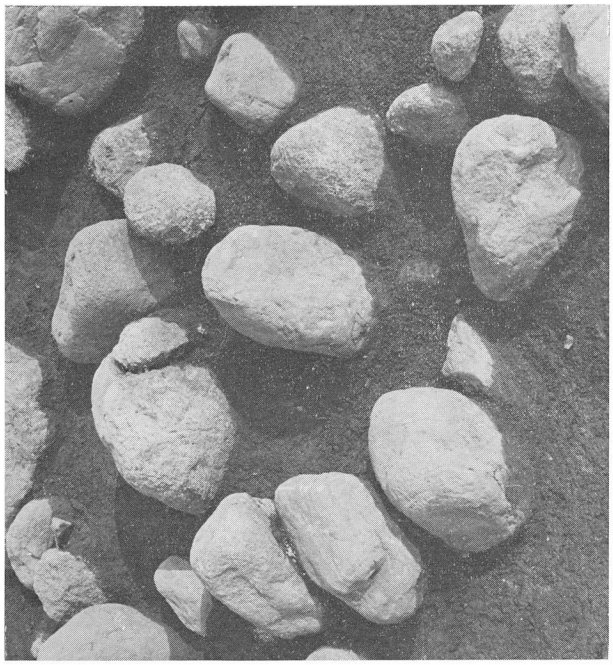


図版 6 藤助畑 配石址

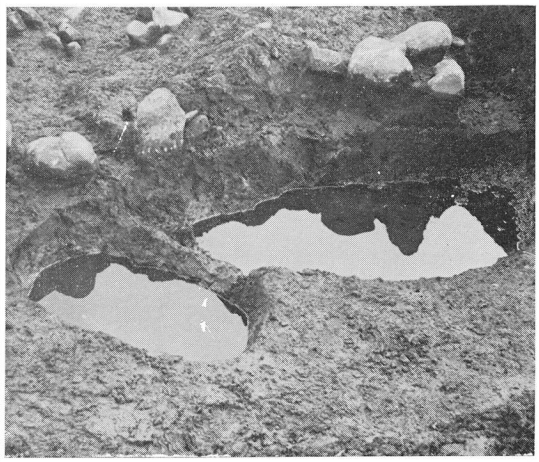


1

2



3



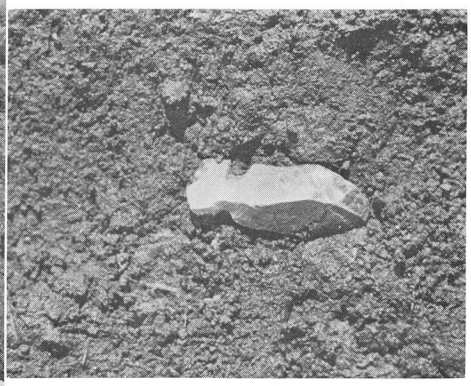
4

図版 7

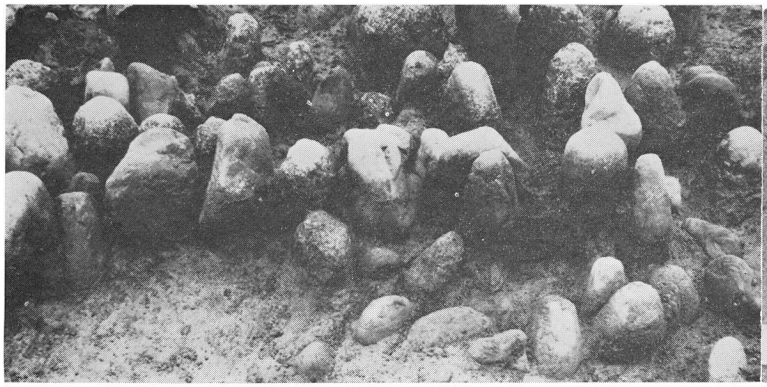
1, 3　配 石 址

2　藤助畑 2 号住居址埋甕　　4　土　壙

1



2



3

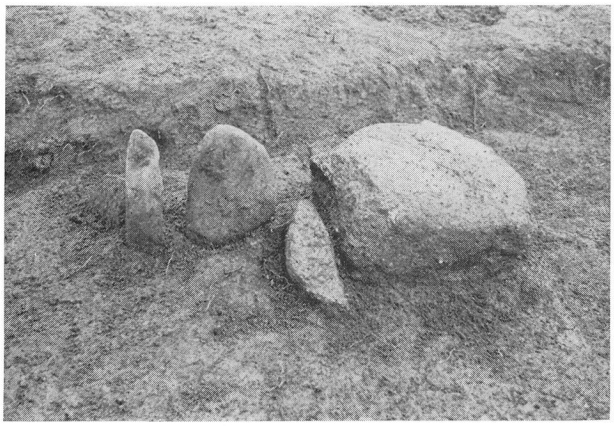
4

5

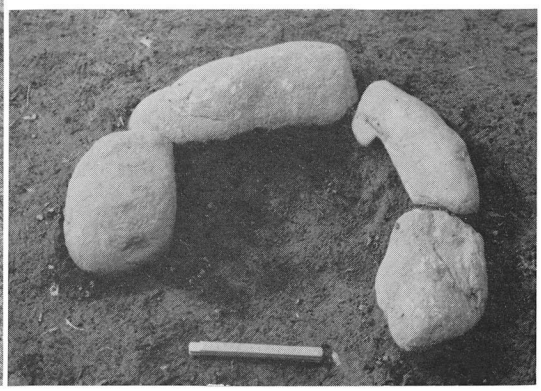
図版 8

1，3　藤助畑配石址　　2　石匙出土状態

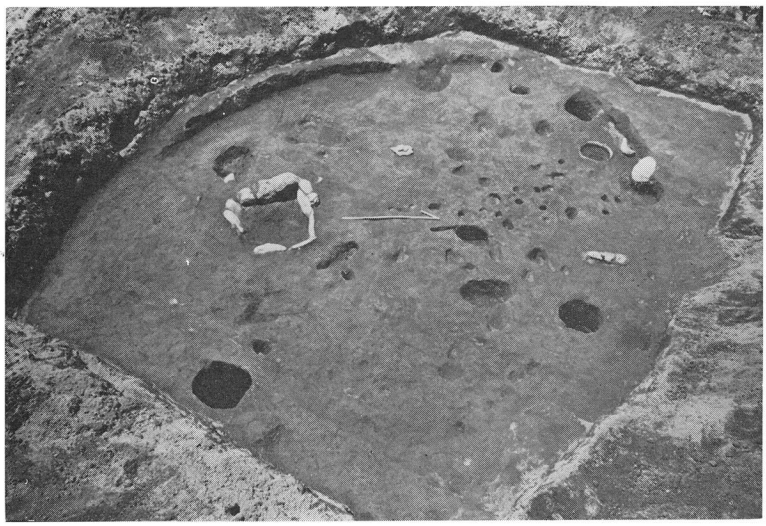
4　配石址石斧出土状態　　5　藤助畑第１号住居址



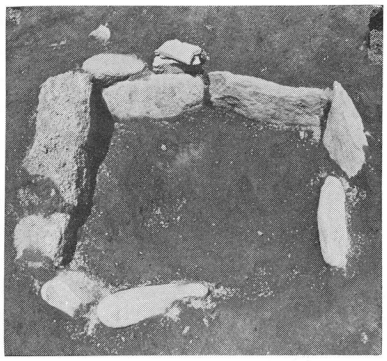
1



2

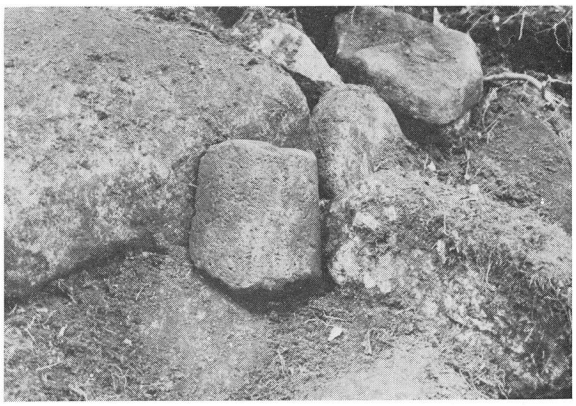


3



4

5



6

図版 9

1　藤助畑第１号住居址立石　　2　藤助畑第１号住居址炉址

3　藤助畑第２号住居址　　4　藤助畑第２号住居址炉址

5　中割原遺跡積石塚発掘　　6　中割原遺跡積石塚石棒出土状態

第Ⅰ章　遺跡の環境

第1節　位　　置

(1)　中割原遺跡は，長野県駒ヶ根市大字赤穂，中割部落に所在する。遺跡地は木曽山脈主峯空木岳 2,854.2m の山麓，標高 788m～773m の傾斜変換地点にあり，駒ヶ根市のほぼ中央を流れる「ねずみ川」の南約 300m にあたり東西 150m，南北 100 m，八幡おとしの沢により運ばれた砂礫の過剰堆積にて東に 5 度の傾斜をなす台地に遺跡は分布する。

(2)　藤助畑，上穂沢遺跡は，同部落の東南端に位置する。駒ヶ根市駅の南西 2km，一般国道 153 号線より西方約 600m，山麓より数えて第 2 段丘比高 5m～10m の舌状台地に在り，標高 694.87m，東南に傾斜し，その南を「一ノ沢谷」と「ねずみ川」に源を発する源蔵おとしが合流した上穂沢川が流れ，丘陵附近には湧水が豊富のため古くから山の田式の水田が開けた土地である。遺跡の範囲は東西 220m 南北 260m で，現況地目は水田が大部分を占めている。

そのうちの台地には住宅がある。本遺跡は駒ヶ根市に於ても早くから知られている遺跡である。

第2節　地　形・地　質

木曽山脈と赤石山脈との間に形成された伊那盆地は，断面的に東西幾段丘かの地形を形成した，それをさらに天竜川によって中間を南北に縦谷を形成したのである。又一部の段丘は明らかに天竜川の浸蝕にて河岸段丘が発達した箇所も見受けられる。これ等の浸蝕活動と共に両山脈に源を発する小河川が伊那谷を東西に開鑿したのが伊那谷特有の田切地形である。この小河川もまた幾つかの沖積段丘を作った。伊那谷の遺跡地はこの沖積台地にも分布される。またさらにこれら小河川の過剰堆積による扇状地にも遺跡は所在するのである。ここ駒ヶ根市は，伊那谷全体からいうなれば中央やや北寄りに位置し，現在平坦部の標高は 500m～700m。天竜川を起点として西側に 6km 東側に 2km の広範な地域である。駒ヶ根市は旧中沢村及び伊那村と合併して出来た小都市であるが，今回は旧赤穂地区を対象として取扱う。赤穂地区の西は木曽駒ヶ岳主峯 2,956.3m と，空木岳 2,854.2m より流れ出ずる太田切川最大洪水時，1,200 立方 m 6% の急流と，空木岳及び 2,852m 南駒ヶ岳に源を発する中田切川最大洪水量，460 立方 m 太田切川と同一勾配の急流にて宮田村及び飯島町と境界をなしている。現在駒ヶ根橋の附近に於ては現況河川の比高は零に近い状態であることに依っても知ることが出来る如く，北割北原北部は近世にあっても太田切川の氾濫原となった。また古田切川も，古くは太田切川支流であったのである。

その外，太田切川，中田切川等大河川の中間に北より古城の奥に源を発する「ねずみ川」，この「ねずみ川」は駒ヶ根の市街地の南端を流れその下流は上赤須にて上穂沢川に合流する。「ねずみ川」の南には古城の谷と一の沢の谷との中間の小谷より流れ出ずる八幡落しがあり，微地形的ではあるが古代集落形成上欠くことの出来ない自然環境を作っている。八幡落しの南に上穂沢川があり，「大日影谷」と「一ノ沢谷」の 2 流を合せたのが上穂沢川である。上穂沢川は，中山原・北方，横前を経て上穂沢部落の南を東流し国道附近で舟山遺跡の北を流れ赤須に至り天竜川に注ぐ。中割原，上穂沢，藤助畑の各遺跡は以上の自然条件の上に立って成立した遺跡であることはいうまでもない。

藤助畑遺跡附近の地質構造は，基盤に木曽山脈を構成する。花崗岩，変成，片磨岩径 10cm～50cm，大は 2m におよぶ礫層を基盤とし，その直上に 100cm 黄褐色の粘土化した砂を含むローム層が認められ，このロームの上部 30cm，丸味を帯びた 2cm×4cm 内外の花崗岩礫が砂と混じてみられる。更にこの上部に黄色の強い粘土化した層 60cm，その上に 30cm のぽこぽこした鮮褐色のローム，更にその上に褐色のローム 60cm，最上 30cm～40cm の黒色土という地質構造である。住居址の発見された層位は，褐色ローム層である。又配石址の発見された層は一段底い場所で黄褐色の粘土化した層の最下部礫層に接して発見された。

第3節　歴 史 的 環 境

第 1 次発掘調査において調査された藤助畑，上穂沢遺跡をとりまく遺跡を，古い道筋にそって追ってみると初期春日街道中田切字大橋から大徳原南，大徳原，大徳原北，横山新田南，横山新田，三っ石，中割原遺跡（縄文中期，後期）がある。第 1 期線より分岐した春日街道第 2 期線沿いには，新田原及び，塩木遺跡（縄文中期），北原遺跡があり，第 3 期線には湯原，塩木，北原（縄文中期）遺跡がある。

元伊那街道は辻沢の坂頭から分岐，最南端の光前寺道附近には，辻沢遺跡（縄文早期，前期，中期，平安期），大城林，上穂沢，藤助畑，南形，大手，馬場，富士山（縄文中期，後期，古墳）の各遺跡，更に北に進んで，太田切橋上流 300～400 m地点で宮田に渡る。宮田にもこの道筋には多くの遺跡がある。

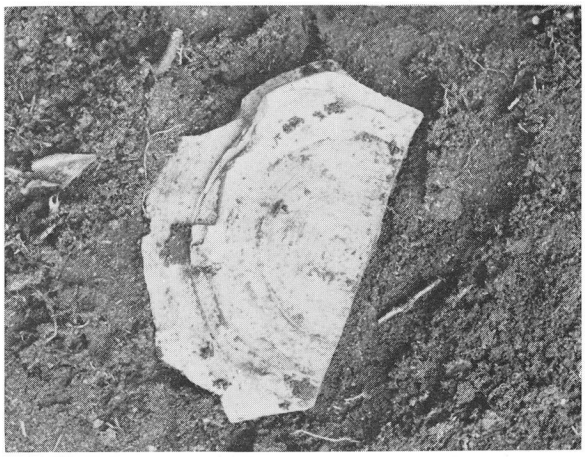
古い歴史をもつ光前寺道に沿って，福岡辻沢の坂頭から光前寺に至る道筋には，辻沢作左ヱ門分遺跡（縄文早期，中期，古墳期，平安期）がある。元伊那街道は辻沢の坂頭から分岐して，段丘下を北へ向うと，馬見塚，大

城林，上穂沢，旧八幡社跡，八幡原，四分一（縄文中期）遺跡がある。この道は，元春日社境内の南を西に上り唐松新田，駒石，馬瀬口にて，小町谷集会所北より上ってきた光前寺道と合し，更に，西に向い，休堂，光香庵，古念仏堂等，光前寺に関係のある史跡が多い。また，小学校北より，上ってくると下ノ坊，柏木，塩木，女体（縄文中期）遺跡，更に，地蔵堂，六地蔵の辻にて，元郵便局の西より上って来た道は，安楽寺，馬場稲荷の辻で北町から上ってきた道と合流し，板橋，女体，切石墓地遺跡（縄文中期，平安期）の上で，宮田から上ってきた光前寺道に合流する。又，月花町茶堂より北原遺跡（縄文前期，中期）を通り，神願の森，仁王門に至る。こうした古い光前寺道筋には，駒ヶ根市にあっても重要な遺跡及び史跡が多い。

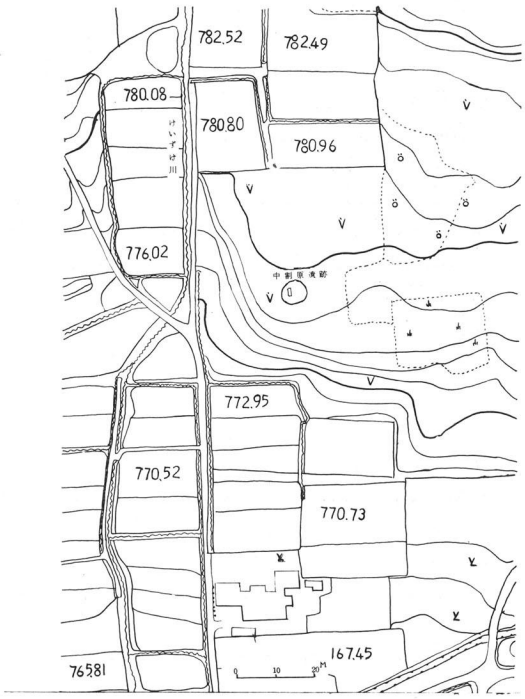
図版 10　藤助畑地形図

中割原遺跡は，中割原字一本松の共同墓地を中心とした一帯の地域で，太田切城及び，その附属の古城，荒城に関連のある砦の跡ではないかと思われる。ここには古い空堀，土塁址，大小積石塚10数基あったが，現在は11基残っているのみである。治承4年太田切城主，菅ノ冠者友則は，古城又は荒城で自刃と伝えられるが，その一族の兵士たちの墓ではなかろうかと興味をもち調査したが，縄文中期の土器，石器及び，灰釉が出土したのみで，太田切城にかかわる資料は今回の調査に於ては得られなかったが，今後の研究に期待をかけたいものである。

（下村忠比古）



図版 11　中割原積石塚灰釉出土状態



図版 12　中割原遺跡地形図

第Ⅱ章　第1次発掘調査の経過

第1節　発掘調査の動機と経過

駒ヶ根市中割地籍からは，広範囲にわたって遺物が出土し，駒ヶ根博物館の分布調査によっても数ヶ所の遺跡が発見されていた。

この地区が県営ほ場整備事業地区となるに至って，昭和44年7月8日から3日間，長野県教育委員会指導主事神村透氏ほかの方々によって緊急分布調査が実施され，遺跡の分布が認められた。

それから一年を経過した昭和45年7月7日，県営ほ場整備事業大田切地区土地改良区副理事小平保義氏より工事に着工したいので調査してほしい旨要請があり，直ちに長野県教育委員会に連絡，緊急発掘調査を実施して記録保存するよう指示を得たので，南信土地改良事務所と連絡し，同日関係者によって現地調査を実施。7月9日駒ヶ根市教育委員会事務局に於て関係者の具体的打合せを実施，駒ヶ根博物館が実務を担当することに決定。7月10日，南信土地改良事務所長と駒ヶ根市長との間に「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約」を締結，7月11日，友野良一氏を団長とする調査団を編成して調査をお願いし，午後1時から関係者が現地を一巡調査したのち，駒ヶ根博物館において発掘調査に関する第1回打合せ会を実施，7月14日から着工することに決定した。

第2節　調査の組織

◦県営ほ場整備事業大田切地区（昭和45年度）第1次緊急発掘調査事務局

小池　金義	駒ヶ根博物館長	
下村忠比古	駒ヶ根博物館専任学芸員	
福沢　正陽	駒ヶ根博物館（現場責任者）	
武蔵　法子	駒ヶ根博物館	

◦調　査　団

顧　　問	林　茂樹	（日本考古学協会会員）
調査団長	友野　良一	（長野県考古学会会員・駒ヶ根博物館学芸員）
調　査　員	木下平八郎	（長野県考古学会会員）
〃	遮那藤麻呂	（長野県考古学会会員）
〃	小池　政美	（国学院大学学生）
特別参加調査員	福沢　幸一	（長野県考古学会会員）
調査補助員	清　水　満	（長野県考古学会会員・上伊那郷土館学芸員）
〃	山田　年	（長野県考古学会会員）
〃	田中　清文	（駒ヶ根市）
〃	伊藤　修	（飯島町）
指　　導	今村　善興	（長野県教育委員会指導主事）

発掘調査は7月14日から8月2日まで実施し，以後補充調査を行って，9月10日に現地調査を完了した。

調査を実施するに当っては，長野県教育委員会，顧問の林茂樹先生のご指導をいただき，南信土地改良事務所，調査団員，堺沢昌司氏ほか地主，市当局，大田切土地改良区第2換地工区の関係者，石田組，小平建設，駒ヶ根郷土研究会の気賀沢会長，赤穂高校・赤穂中学校生徒，地元中割の協力者等の諸氏をはじめ，多くの方々の献身的ご協力と，ご配慮によって，ここに初期の目的を果すことができましたことを，心からお礼申しあげる次第です。

（小池　金義）

第3節　発掘作業経過

7月14日（火）曇のち雨　午前8時30分，駒ヶ根博物館に集合。午前9時から現地において着工式。博物館長挨拶，調査団員，第Ⅱ換地工区役員の紹介，友野団長挨拶，木下，遮那調査員より作業についての説明，打合せを行なったのち着工。なお，作業時間は午前9時から午後5時30分までと定めた。前田地区にトレンチ，グリット10ヶ所を設定し調査。遺構のないことが確認されたので，藤助畑地区の調査に着手。水田中央部と先端部に各1本のトレンチを設けたが，中央部はすでにロームが削りとられて遺構の存在が認められず，先端部の埋立部分に主力を注いで調査。耕土30cm，ローム床土90cm，その下部からかつての表土（黒土）が認められたため，石田組のブルドーザーによりこの部分の取除きを行ない，更に藤助畑の下段に続く日向畑の試掘を行なったところ，黒土中より自然石が円形に並ぶ遺構を確認した。

作業人員　調査員3名，協力員3名，作業員4名。

7月15日（水）晴　　昨日確認した日向畑の石組を，藤助畑地籍に掘拡げると共に，ブルドーザーにより表土掘削を行なう。遺物の出土は，縄文中期の土器片若干と，石匙1点。

作業人員　調査員2名，協力員6名，作業員6名。

7月16日（木）曇ときどき小雨　　昨日に引続き藤助畑の配石の掘出しを進めたが，雨のため泥土の掘上げは難行。石の洗条を行ないながら掘拡げる。

一方，藤助畑水田地域のうち，水田にならなかった部分を調査し，住居址（1号）を発見，石組の炉，焼土，直立して発見された立石，石斧，石皿，土器片を写真撮影ののち採集したほか，藤助畑の野菜畑にトレンチ1，そのほか，ピット10個を設定。

作業人員，調査員2名，協力員4名，作業員8名。

7月17日（金）曇のち雨　　藤助畑の配石遺構を北西に掘進めると共に実測を始める。雨のため午前中で作業を中止する。

作業人員，調査員2名，協力員2名，作業員6名。

7月18日（土）曇のち晴　　昨日に引続いて配石の拡大作業を行ない，西面の検出に全力をあげる。北にゆくほどグループのまとまりが大きく，石も大型になったがプランは同じである。一方16日に行なった野菜畑にピットを10数カ所掘って遺構の発見につとめたが，配石の北西約20mの地点に住居址（2号）を発見し調査を始めた。

作業人員，調査員2名，補助員2名，協力員3名，作業員9名。

7月19日（日）晴　　配石遺構の拡大と，2号住居址の発掘に全力をあげ，2号址より炉，埋甕を検出する。山田調査補助員によって，住居址及び藤助畑全体測量を行なう。

顧問林茂樹先生が指導のため見えられた。

作業人員　調査員2名，補助員2名，協力員3名，作業員7名。

7月20日（月）晴　　藤助畑配石遺構の拡大作業。第2号住居址の清掃，実測，写真撮影，埋甕の掘上げを行なう。

作業人員　調査員2名，補助員3名，協力者5名，作業員7名。

7月21日（火）晴　　炎天下玉の汗して配石遺構の掘上げ，西方への拡大を続け，ブルドーザーによる表土，掘上げた土の除去作業を行ない，一方配石の清掃作業をはじめる。

作業人員　調査員2名，補助員2名，協力員4名，作業員7名。

7月22日（水）晴　　昨日ブルドーザーにて掘削を行なった下部を掘上げ，配石遺構の拡大作業を行なったが，湧水によって土が泥となり作業は難行する。

作業人員　調査員2名，補助員2名，協力員3名，作業員8名。

7月23日（木）晴　　藤助畑配石遺構の実測，下林地区，上穂沢地区の調査に着手する。下林地区の馬鈴薯畑にトレンチ2本，グリット4カ所設定し調査するも遺構を発見せず，午前中で作業を中止し，午後から上穂沢遺跡にグリット5カ所を設定し作業をはじめた。

作業人員　調査員3名，補助員1名，協力員3名，作業員6名。

7月24日（金）晴　　藤助畑配石の実測。下林地区を小平建設のブルドーザーにより全面掘削を行なったが遺構なくこの地区の調査を完了。午後から中割原遺跡の調査に着手。グリットを5カ所設定し作業を始めた。

作業人員　調査員2名，協力員3名，作業員3名。

7月25日（土）晴　　藤助畑配石の実測。午後から配石の下部調査をはじめたが，立石はロームの上面より立てられ，配石遺構は中央部のみ若干落込んでおり，小土拡ではないか。

また一昨日発掘した上穂沢遺跡の出土品採集を行なったが，遺構はすでに開田の折破壊されていた。

なお本日は樋口昇一先生が指導のため見えられた。

作業人員　調査員3名，補助員1名，協力員3名，作業員5名。

7月26日（日）晴　　藤助畑配石の床面掘下げ作業と写真撮影。
作業人員　調査員3名，補助員2名，協力員4名，作業員5名。

7月27日（月）晴　　藤助畑配石の床面掘下げと，配石の一部除去作業。主要器材の引上げを行なった。
作業人員　調査員3名，協力員4名。

7月30日（木）小雨　　藤助畑配石の下部調査，床上の採集等行なったが，雨のため出土品の整理をはじめた。
作業人員　調査員2名，協力員3名。

7月31日（金）曇ときどき雨　　配石の掘出しと下部調査。
作業人員　調査員2名，協力員2名。

8月1日（土）曇ときどき雨　　藤助畑配石遺構にトレンチを設け，床面調査。
作業人員　調査員3名，協力員4名，作業員3名。

8月2日（日）晴　　配石の除去作業，立石の底部調査を行なって，藤助畑の作業を完了した。
作業人員　調査員3名，協力員3名，作業員4名。

8月21日（金）ときどき雨　　出土品の整理をはじめた。

8月28日（金）晴　　藤助畑地籍のブルドーザーによる全面掘削作業を実施したが，遺構の発見はなく，器材の引上げを行なう。
作業人員　博物館職員2名，作業員1名。

8月30日（日）晴　　中割原遺跡の積石発掘作業。
作業人員　調査員1名，協力員2名，作業員13名。

8月31日（月）晴，にわか雨　　中割原遺跡積石発掘作業，巨石があり作業難行。
作業人員　調査員1名，協力員2名，作業員1名。

9月3日（木）晴　　中割原遺跡発掘調査，本日をもって完了する。
作業人員　調査員1名，補助員2名，協力員2名，作業員13名。

9月6日（日）晴　　中割原遺跡埋戻作業。
作業人員　博物館職員1名，作業員12名。

9月10日（木）晴　　中割原遺跡ほか第1次関係遺跡片つけと，8月21日より実施してきた遺物整理を終り，現地調査を本日無事完了した。
作業人員　補助員1名，作業員1名。

なお調査期間中に，長野県教育委員会の今村指導主事さん，早大教授滝口宏先生はじめ，南信土地改良事務所の所長さんほか全職員，長野県博物館関係職員，駒ケ根市議会文教社会委員，駒ケ根市図書館協議会委員，地元換地工区関係者等々多くの方々がお見えになり，ご指導と激励をいただいたことを付記し，お礼を申しあげる次第です。

第1次参加者　下村忠比古　伊藤　修　田中　清文　下村　修　気賀沢善右衛門　斉藤　由幸
今井　正男　下島　照美　山本喜久男　井口　富男　竹内杉九郎　松沢　源逸
倉田　源重　山本　清明　石沢　新作　松沢　睦美　山本　清安　飯塚　光夫
田中　健造　小平喜一郎　倉田　一恵　倉田　俊　小町谷すみ子　田中　春子
倉田八千代　堺沢　昌司　堺沢　寿男　（小池　金義）

第Ⅲ章　遺　　構

上穂沢遺跡第１号住居址

上穂沢遺跡の発見されたのは，昭和27年の春のことである。この上穂沢遺跡は，藤助畑の南東堺沢伊衛門氏の墓地の東の畑を水田にする時発見されたものである。

筆者の父が堺沢伊衛門氏の開田の手伝いにいっていて発見したもので，褐色土中に掘込まれた竪穴のあるのに気づき，筆者に急報してくれたので，早速調査したところローム層に掘込んで作られたPtと自然石を用いた方形の炉址と甕形土器の一箇体分が発見された，壁は北側の一部が確認されたのみで他はすでに破壊されてしまっていた。

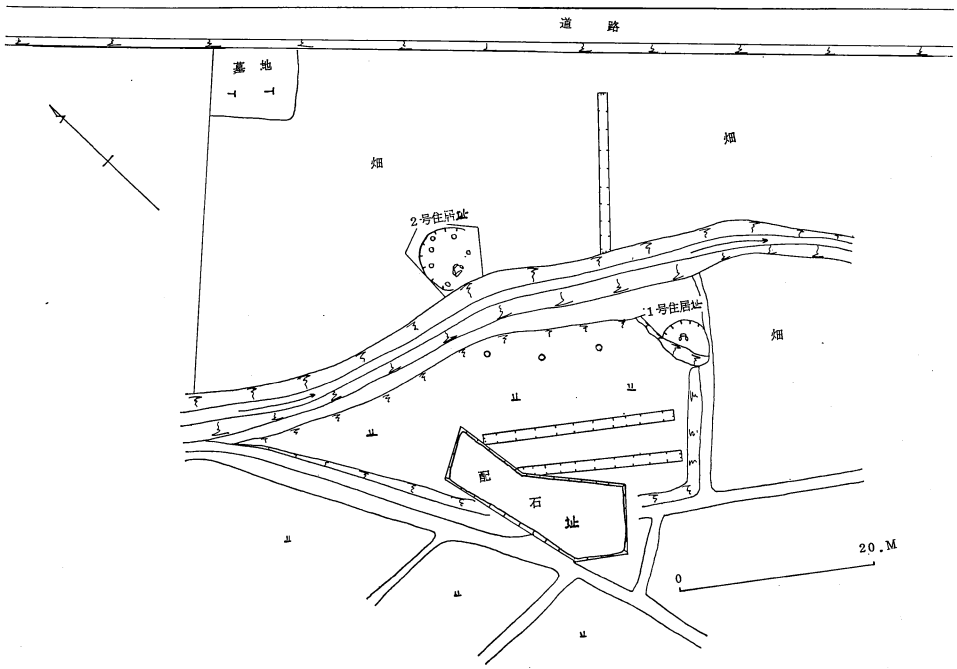
床面も炉址の付近に僅か認められた程度，住居址のプランは大略の推定で５m内外の円形ではないかと思われるもの。

上穂沢遺跡第２号住居址

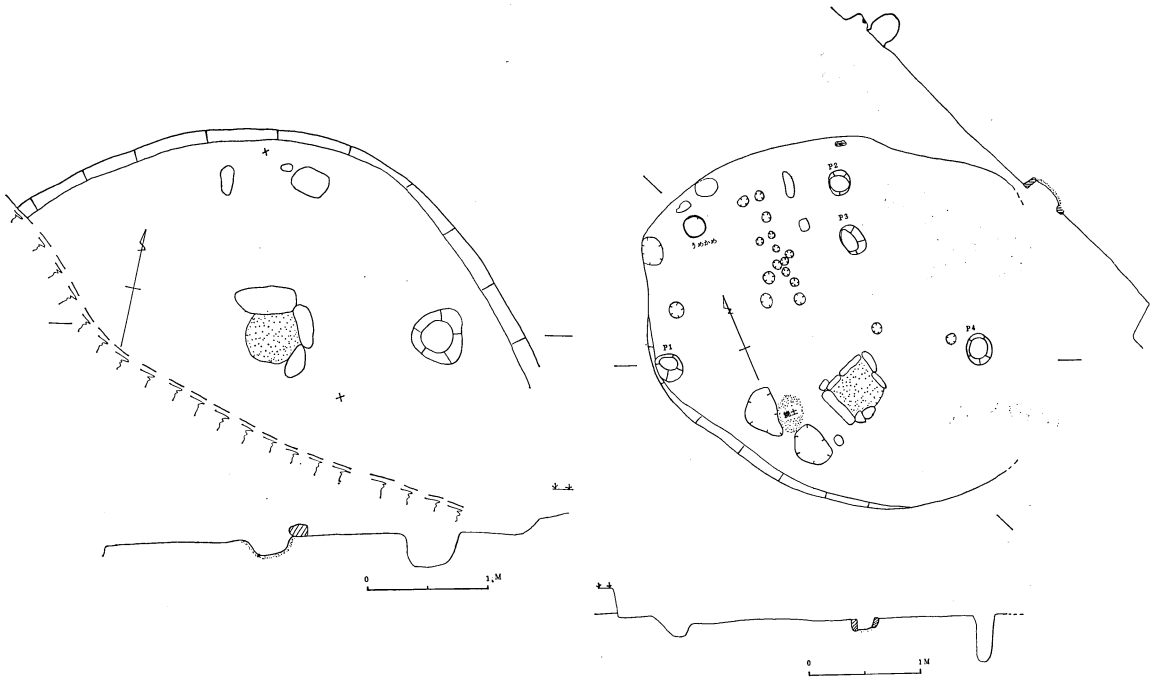
第２号住居址も，第１号住居址と同時に発見された住居址で，位置は第１号住居址の東北10mの所に発見された。本住居址も第１号住居址と同じく開田工事中であったので住居址の過半は切土として掘取られてしまい，住居址の発見された時は，自然石を組合せて作った方形石囲炉と，その周囲1.5m内外と床面叩の一部のみが発見されたのみで，柱穴も壁の深さも他の床面施設も知ることはできなかった。然し炉址の内部に縄文式中期末葉の土器片を数片発見することが出来たので住居址の時期を知ることができたのは幸であった。その外この付近の畑からは土器片が多く発見されているのをみると，縄文中期の集落の存することを予想できるのである。

上 穂 沢 遺 跡

本遺跡は，藤助畑遺跡の南西200m八幡原地籍の東端舌状台地にある遺跡で，標高693～698m，東西70m南北75m上穂沢の北岸段丘にあり東に傾斜した遺跡であって，今回ほ場整備事業の埋蔵文化財調査主要一地点である。本遺跡は古くから，上穂沢遺跡として知られていた遺跡で，特に石斧，石鏃，石皿が多量に出土していて今回の調査では有望地点とされていたのであるが，現実に調査してみると，今迄にほとんど破壊され尽しているために調査は断念せざるを得なかったので，出土遺物のみを載せ記録にとどめる。　　（友野　良一）



図版 13　藤助畑遺跡遺構実測図



図版 14　藤助畑遺跡住居址実測図　左 1号　右 2号

藤助畑遺跡第1号住居址　　**図版 14　左**

1号住居址は，第2号住居址の約 20m 東南に存在するもので，この地点はやや南面する傾斜地である。現在この地点は水田となっているが，かつては畑地であり，水田の東隅に原野となっている地点が昔の地形を止めるにすぎず，水田面はこの原野より約 80cm 削り取られている。

かかる住居址は，この原野となっている地点の調査で発見されたものであり，住居址の南側半分は，水田のため削り取られている。住居址は炉址を中心に南北 2.5m，東西約 4.7m を残す竪穴住居址でローム面を約 1.5cm 掘り込んで構築され，炉址は河原石3個が現存する石囲炉であり，径 50cm を算するものである。柱穴は，炉址の東側 1m に1カ所発見されたのみであった。また炉址北壁よりに花崗岩の石皿が1点ふせた状態で遺存していた。なお石皿の近くの壁よりに砂岩製の打製石斧1点が直立して発見された。この打製石斧は，あたかも床面につきささったかのごとく状態で発見されたものである。また炉址近くの床面上に，土器1個体分が発見されたのみであり，その他は特記すべき出土遺物はない。発見された土器は中期末葉に比定されるものである。住居址の床面も良好とはいえない。

（遮那藤麻呂）

第2号住居址　　**図版 14　右**

本址は，中割字藤助畑地籍の北側道路の南墓地南東 15m，上穂沢部落に注ぐ用水路の北側に発見された住居址である。住居址の出土した標高は 694,87m で，長軸 3.6m，短軸 3.2m，南方に楕円形をなす竪穴住居址である。壁高は住居址の北側で 50cm，壁の断面は上方に 17 度開いた角度に掘り込まれている。ローム層への掘込みは 20cm～22cm，その上は黒色土層である。北壁から西壁にかけて，幅 7cm～10cm，深さ 4cm～6cm の周湟が認められたが，周湟内には特別の施設は発見されなかった。

床面は，全般的に堅く踏固められているが，炉址の南約 1m よりは，やや軟弱でありロームに掘り込まれた壁も不明瞭となっている。床面は，南西に1度30分の傾斜をなしている。また床面には口径 7cm～20cm，深さ 10cm～25cm の小ピットが散見された。北壁に接して偏平状の花崗岩石がおかれていた。

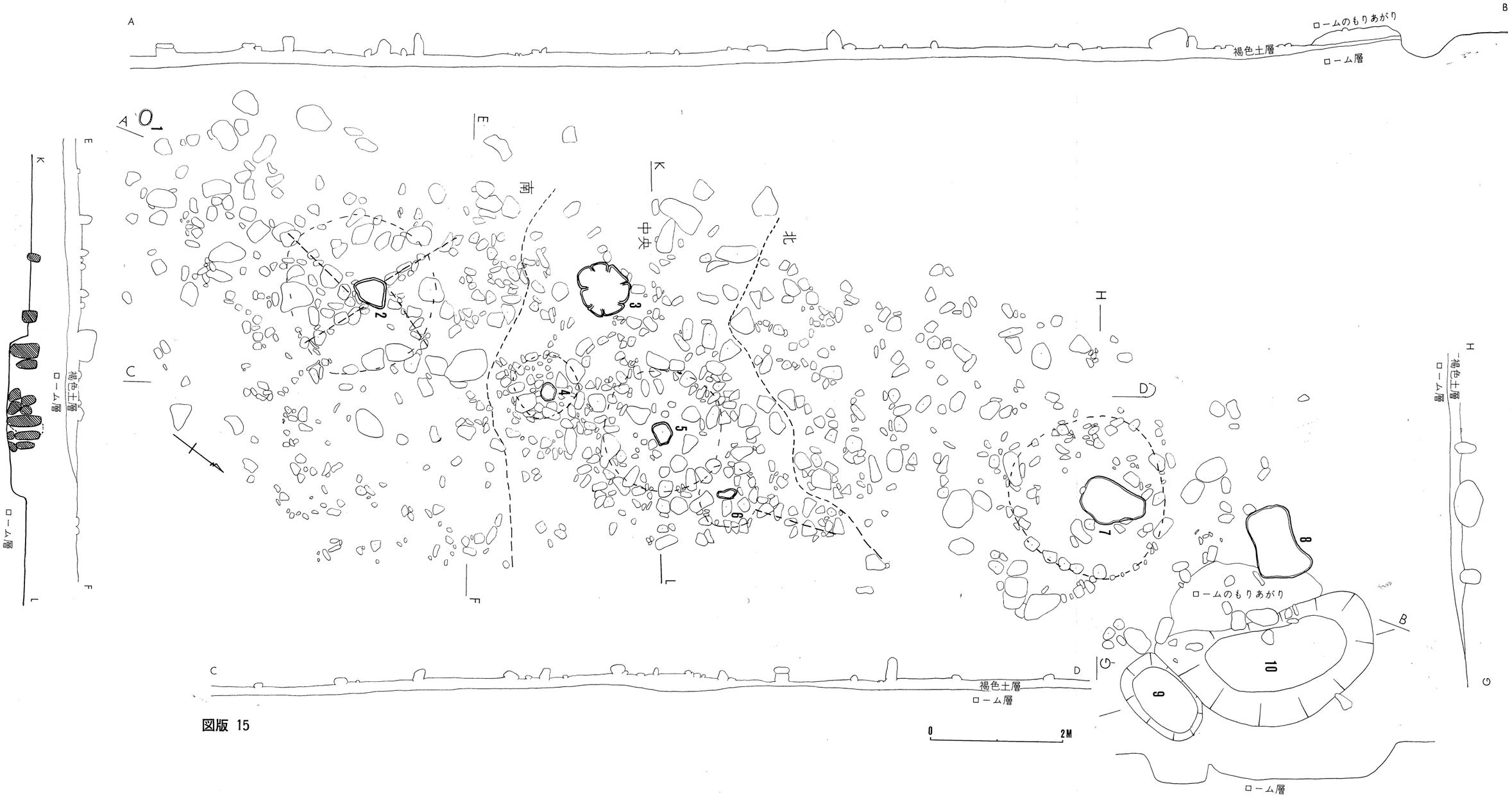
埋甕。図版7－2本住居址には北壁に接して床面水平に口径 38cm，高さ 39cm 直立に埋られた縄文中期末葉の埋甕があった。この埋甕の中には黒色土が充満していたが，土器及び石器類，その他の物質は発見出来なかった。

炉址は，中央よりやや西約 50cm の個所に設けられている。炉址は方形八箇の長さ 14cm～38cm，高さ 12cm～24cm，花崗岩の自然石を用いて作られている。しかし南側の一部の石を欠いてる。炉址の内は赤くよく焼けていた。

柱穴は6カ所検出されたが，P_1, P_2, P_3, P_5, P_6 の5箇と考えられる，柱穴の深さは P_3 の －15cm～P_6 の －30cm，柱穴としては余り深い方ではない。

（友野　良一）

出土遺物は，縄文中期末葉。



図版 15

藤助畑第3・第4・第5号住居址

第3・4・5号住居址は，開田当時第1号住居址と略同レベルの高さに発見された。住居址の位置は，井筋の南側に第2号住居址の南辺まで第1号住居址を東として西側に並列状に発見された。いずれも炉址は石囲炉であった，開田中の発見であるので，柱穴とか，壁は確認されず，炉址のみ注意された程度であるが，発見者の記憶では，今回発見された第1号住居址と略同形の住居址であったという。遺物はその時井筋の土手に発見者が置いたというので，草叢を捜したところ幸遺物を発見することが出来た。この遺物は，第1号住居址出土の土器と同じもので縄文中期末葉に分類されるものである。　（友野　良一）

配　石　遺　構　　図版 15

この遺構は藤助畑台地の南方，上穂沢川に向ってゆるやかに傾斜をする地点に検出された遺構である。

台地南縁に所在する，第1号住居址，その北約 20m の所に発見された第2号住居址，この間開田工事中3箇の住居址が発見されている。この住居址より約南 10m，やや下った所，その比高約 2m 現在この地点は水田である。その水田の南に 1.3m 前後の土手があり，この土手の下を幅 2m の農道が通っており，この農道の南側は，藤助畑地籍ではなく，日向地籍である。従って配石址は事実上は日向地籍にまたがっているのであるが，一応藤助畑遺跡と呼ぶことにした。この農道に添って南に三角形の麦畑があり，この畑の南端にピットを入れたところ，表土下 30cm に，20×25cm の平石が現われる。その西側に 30×40 前後の川原石が 40～50cm 間隔に数個散在した，最初石囲炉址の一部ではないかと考えられたが，焼土もなく，炭化物等まったく発見されず，配石は北へ北へと伸びてゆく，農道を越えて上段先程住居址が3個発見されたという水田の下に続くようである。この水田の造成時は，北東部の高い個所を切取り南側の底い場所に埋立ている，この埋立が 1m 以上に達しているので，除土には相当の労力を費した。次に水田の中央部にいま一つのピットを入れてみると，表土下 1m に，前ピットと同じレベル上に配石が認められ，この遺構は南北の方向に造られていることを大略知ることができた。南壁より 10m 程北に掘り進んだるところ，急に湧水が多くなり，それに加えて雨水が流れ込み，作業は一更困難をきわめた。この泥まみれの発掘も執念一通で8日間にわたって東西 15m，南北 8m，面積 120m² の配石址を掘り上げる。

本配石址に使用されている石は，遺跡の南方 300m を流れる上穂沢川に産する石を運んで作られたものである。配石の約 70% は現に立っていたが，他の石も配石址築造当時は立っていたものではなかろうか，立石は一部を除いて大方は黒色土中にあり，その根部は大きなものはローム層に掘込まれている。あるものは直列にある方向に配し，あるものは円形グループを作り，またあるものは不規則に配され，その円径も一定せず大小混じて全体のバランスを作っている。

この配石を大きく別けて，南と，中央と北側とに区分することができる。記述の順次として最初発見された方から述べてみると。

1.　最初に発見された上を平にした平盤石，これが発掘の動機となったのである。

2.　1の北西 4m 真々の所に発見されたグループで二重に示した径 40×50cm の自然石を中心に直径 2m 余，石の数 69 個ほぼ円形をなし，その立石を中心として南西に6個の頭大を中心とする石を直列に配している。次に北西の方向に前同様5個の同大の石を費してやはり直列に作られている。次に南東に同じ方法で 1.2m，それとまったく同じ条件で南方に作られた，放射状の配石である。

3.　中央部南寄りに検出した直径 80cm 高さ 50cm，本遺跡中二番目に大きい自然石で，この石には7ヵ所に刻目があるが，これが人工的なものか，自然的か明らかでない。この石を中心とした直径 2m の不規則のグループである。

4.　3の北寄にあり，直径 20cm 高さ 36cm の立石を中心として，大石は 25～30cm 小石は 10cm 内外の 29 個を直径 1m の円形に配した組石群である。下部は礫石でかためた状態で上部の立石を支えている。この礫石の下はロームである。

5.　本配石群中の中心部のグループである。30×25 高さ 50cm の河原より運ばれた自然石を中心として，直径 2m 大小 71 個の石を使用して，ものの見事に配した組石群である。基部は，礫石を用いて補強しその下部はローム層である。

6.　5の組石の北側に頭大の自然石 21 個にて組石した直径 1m の立石グループである。この配石より北西に 1.3m 直列に同大の石を配している。基部は 4,5 にみられた礫石をもって上部の立石が倒れない様に補強した形に並べてある。

7.　本配石址の北限のグループで，中央の 62×90cm の石を中心として，10×14～20×45cm 内外の石 50 余箇を不規則ではあるがほぼ 2m の円形に組んである。

8.　本配石址の北限に位置する大石でその大きさは 1.05cm×60cm 高さ 60cm 上面が平らな花崗岩石である．これより北には配石は認められなかった。

9.　**土　壙**

本住居址に於いて発見された土壙は，中央部5の底部に発見されたもので，幅 30cm 深さ 25cm 長さ 2m の細

長い形のもので，内部には黒色土が落込んでいたのみで，他の物は何ら発見できなかった。またその外の配石は全部ローム層の直上にあったものである。

10．本址の北西端に発見された土壙である，長径 1.15m，短径 85cm，深さ 45cm，内部は黒色土が充満しその中から，細粒化した木炭が少量検出されたのみで，年代を決定付ける遺物は発見できなかった。

11．10とまったく同じ内容であるが，10より大きく，長い方が 1.80m，幅 95cm，深さ 50cm 舟底形の上壙である。10の方が古く11の方が新しい。

配石址内出土遺物

打製石斧の破片3点，細粒化した木炭，黒色土層中より縄文式中期末葉の土器片及石器が若干検出し得たのみ。配石址付近の住居址発見の土器と同時期のものである。

千数百個にのぼる石を 300m も離れた上穂沢川から運搬した労力は大変なものであったろう。私は明らかに人工的な遺構であると考えるものである。遺物の少ない事は祭が行われた後美しく清掃して清めたものであろうか，原始信仰的要素を多分にもった，祭祀遺跡と考えている。

（木下平八郎）

第Ⅳ章　遺　　物

第1節　土　　器

図版 16—1

この土器は第2号住居址より出土した埋甕で口縁の一部を欠いている。

器型は頸部がくびれた甕型土器である。

口縁部は素文であり，頸部にはヘラ状工具によると思われる刺突列点文がみられる。胴部は縄文地の舌状帯が垂下しており，上部に渦巻文を伴ったものと，単なる舌状帯とが規則的に配列されている。色調は茶褐色を呈し，胎土中には長石を多量に含んでいる，焼成は中位である，時期は中期末葉と思われる。

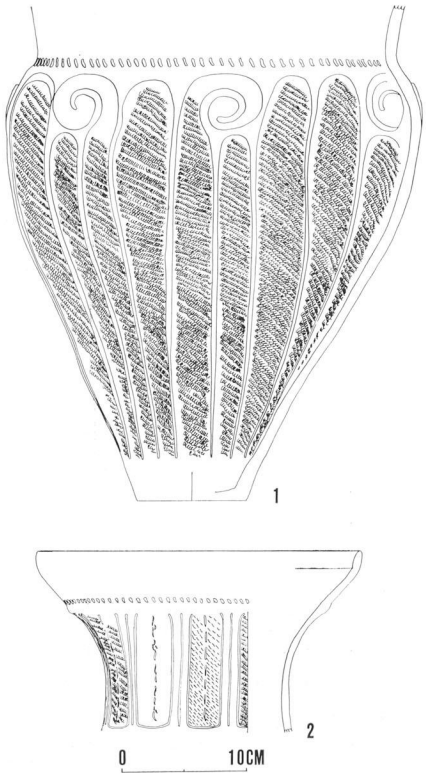
図版 16—2

この土器は第2号住居址床面よりつぶれた状態で発見されたものである。

器形は口縁部が外反する，いわゆるキャリパー状の小型深鉢である。口唇部は肥厚し，内部に段をもつ。口縁部は素文であり，頸部は一条の隆線が認められ，隆線の上部には，ヘラ状工具と思われる刺突の列点がある。胴部は，縄文を地文とし，工具による沈線の区角がなされている。区角内には勢いの弱い蛇行文がみられる。

色調は茶褐色を呈し，胎土には長石を含み，焼成は中位である。

時期は中期末葉に位置すると思われる。



図版 16　藤助畑出土土器

1は2号住居址埋甕　2は同出土

$S=\frac{1}{6}$

土器　図版 17（1～9）

第1号住居址（1～3）

1．色調は茶褐色を呈し，焼成は中位である櫛形文を構成している。櫛形文内部にはヘラによる沈線文を配している。

2．色調は赤褐色を呈し，胎土中に長石を含み，焼成は不良である。器形は小形深鉢である。口縁部は素文であり，胴部文様帯は，二本の隆帯を横に加え，上の隆帯には，爪形文を下の隆帯には沈線文を施してある。上の隆帯から，下の隆帯にかけて，4つの小形捻り把手を加飾してあり，二本の隆帯の下には半截竹管による平行沈線文が縦走や横走している。

3．縄文中期末葉の底部である。

4．黄褐色を呈し，焼成は中位で，胎土中に雲母を含み，胴部にふくらみのある甕形土器である。無文地に沈線施文による構成をなしている。

上穂沢遺跡出土のもの（5～9）

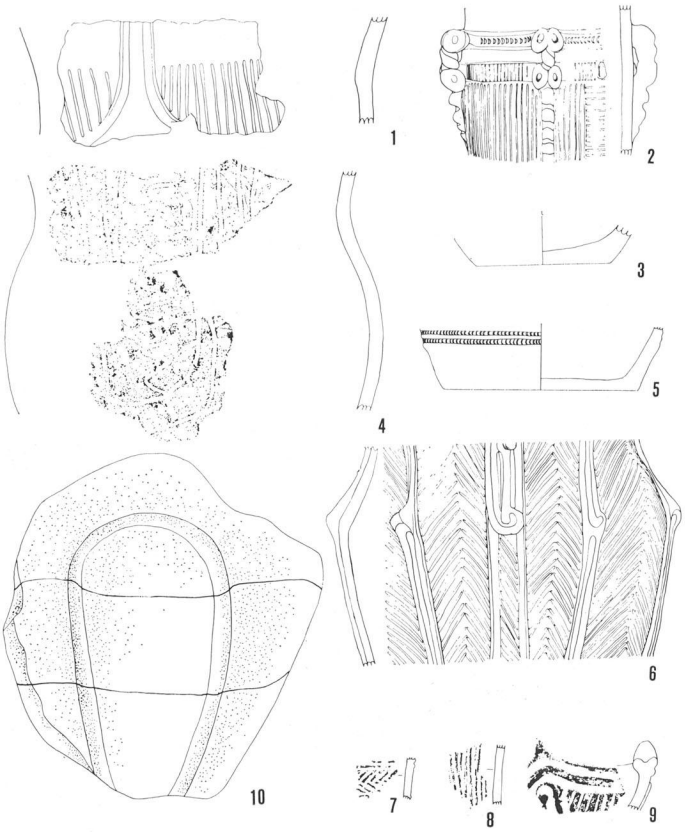
5．色調は茶褐色を呈し，焼成は良好である二本の隆帯を横に加え，その上に連続爪形文を施してある。

6．色調は茶褐色を呈し，焼成は不良であり，胴部にややふくらみをもつ甕形土器である。地文はヘラによる沈線を杉綾状に施し，その上に二条の隆線による懸垂文を施している。胴部のふくらみをもつ部分で懸垂文は突起状を呈する。

7．黄褐色を呈し，焼成は不良で，胎土中に長石を含む。半截竹管による沈線文が施されている。

8．黒褐色を呈し，焼成は良好，半截竹管による沈線文が施されている。

9．茶褐色を呈し，焼成は良好で，胎土中に雲母を含む，突起状の口縁を呈し，粘土紐と沈線によって文様構成をなしている。



図版 17　1～3, 10 藤助畑第1号住居址，4 藤助畑遺跡以前出土，5～9 上穂沢遺跡出土 $S=\frac{1}{6}$

図版 18（1～31）

第1トレンチ。（1～5）

無文地に曲線と直線の組み合せによって，文様構成をなしているもの（1～2）

（1～2）は黒褐色を呈し，焼成は良好である。隆帯を加飾し，その上に爪形文を施しているもの。（3～4）3は，隆帯の縁に沈刻文を有し，4は，隆帯によって区画された中に沈線文を有する。5は，薄いソウメン状の粘土紐を貼り付けている。（3～5）は黄褐色を呈する。

第2号住居址。（6～20）

無文地に波状や直線の沈線を施してあるもの。（6，9，10）

（6，9，10）は黒褐色を呈し，焼成は中位である。隆帯を加え，その上に連続指頭圧痕文を施してあるもの（7～8）7は，指頭圧痕文と半截竹管による沈線によって文様帯を構成している。

（7～8）は黄褐色を呈し，焼成は不良であり，胎土中に長石を含む。

ヘラによる円形状の沈線が配せられているもの。（11～12）は黒褐色を呈し，焼成は良好，胎土中に長石を含む。

縄文地に懸垂文を配しているもの（13～20），（13～14，16）は茶褐色を呈し，焼成は中位で，胎土中に雲母を含む。

（15，17～20）は黒褐色を呈し，焼成は良好で，胎土中に長石を含む。

配石址出土。（21～31）

縄文が地文を構成しているもの．（21～22，24～25）22は，縄文地に隆帯を加え，その上に連続爪形文を配している。

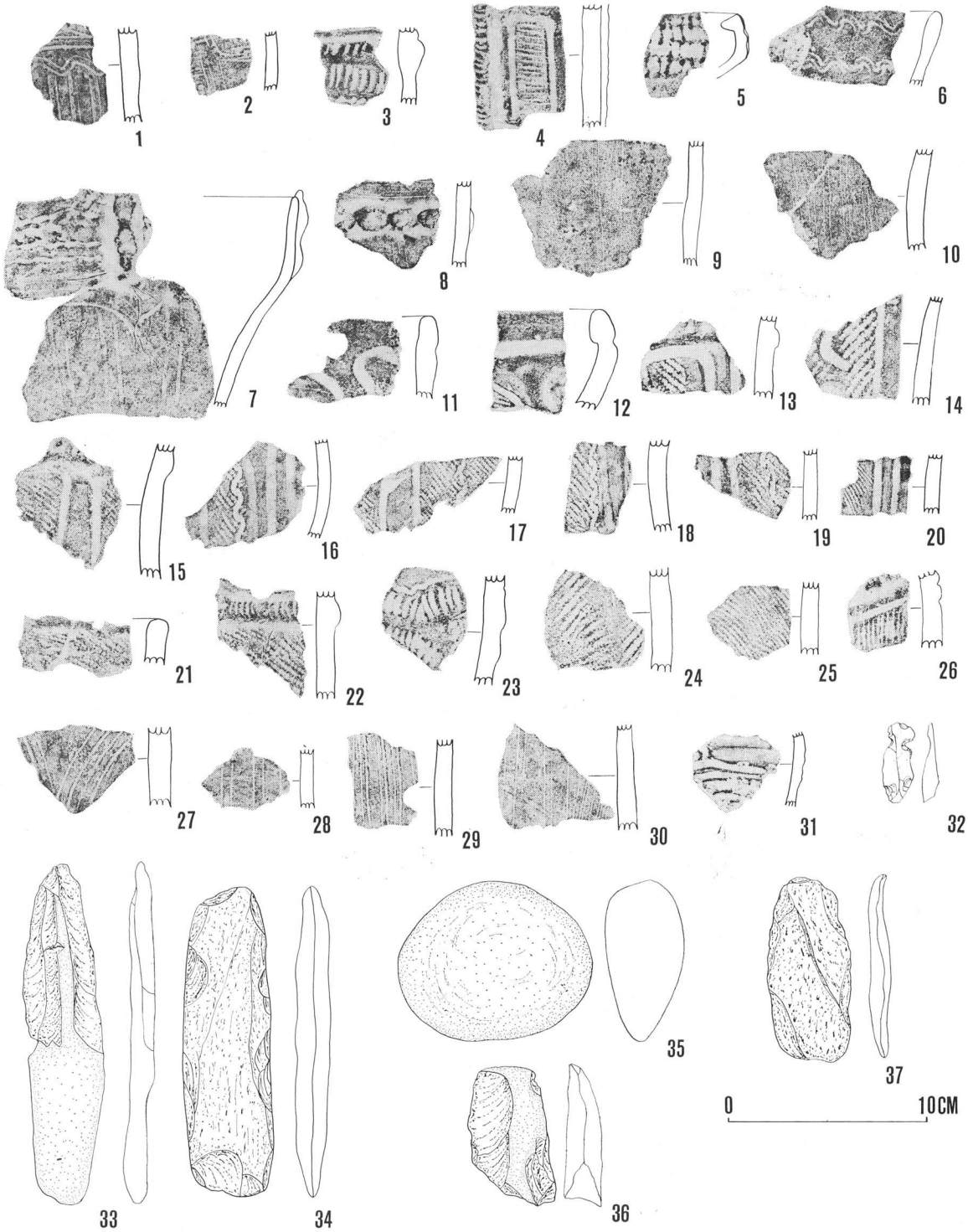
（21～22）は茶褐色を呈し，焼成は中位である。

（24～25）は黄褐色を呈し，焼成は不良である．

隆帯の縁に刻線文を施しているもの。

23は，茶褐色を呈し，焼成は不良である。

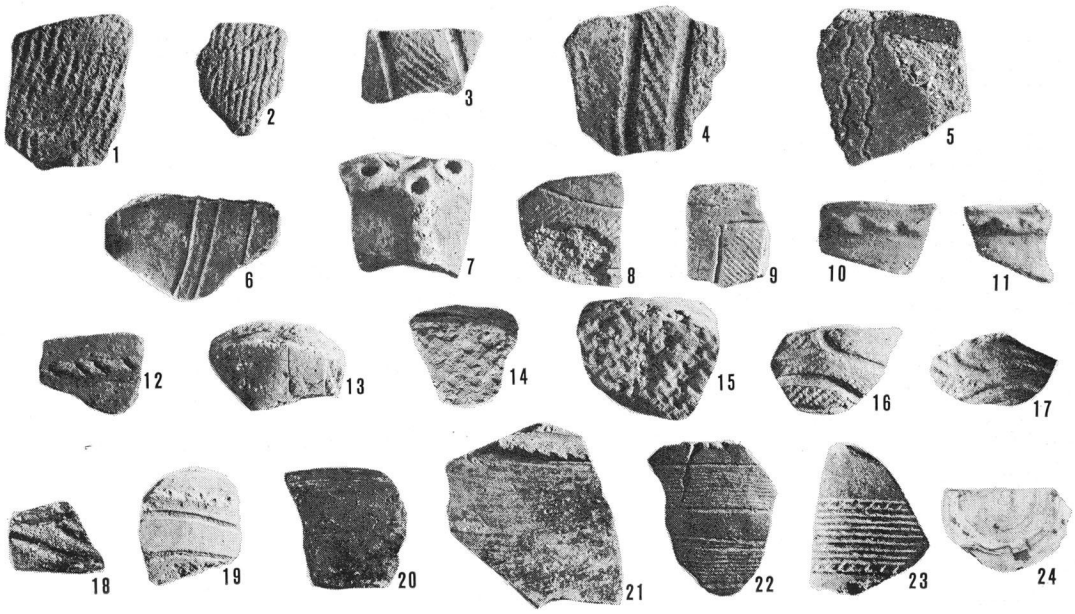
沈線によって文様帯を構成しているもの（26，31）



図版 18　1～5，37 第 1 トレンチ出土，6～20 第 2 号住居址
21～31，32～33，35～36 配石址出土，34 第 1 号住居址出土

$S=\frac{1}{3}$

26は黄褐色を呈し，焼成は不良である。31は，白褐色を呈し，焼成はきわめて良好である。
無文地に半截竹管による沈線文が配せられているもの。(27～30)
(27,29) は黄褐色を呈し，焼成は良好である。
28は，黒色を呈し，焼成は不良である。
30は黒褐色を呈し，焼成は中位である。



図版 19　中割原遺跡出土土器片　$S=\frac{1}{3}$

土器　図版 19 (1～24)

1類 (1～2)……(縄文前期)

1は，雲母や長石（繊維）を含み，黒褐色を呈している。焼成は中位である。斜縄文が施されている。

2は，長石を含み，黒褐色を呈し，焼成は中位である。斜縄文地に薄い粘土紐をはりつけて文様構成をしている。

2は，おそらく，関西系の大歳山式に比定できうるであろう。

2類 (3～4)……縄文中期後葉

縄文地に沈線による懸垂文がみられるもの。

3，4，双方とも雲母が多く含まれている。

3類 (5～6)……縄文後期初頭

無文地に沈線による懸垂文がみられるもの。

5は　長石を含み，6は，雲母を含む，双方とも黒褐色を呈し，焼成は中位である。5は，蛇行状の懸垂文，6は，まっすぐな懸垂文がみられる。

4類 (7)……縄文後期初頭

長石を含み，黄褐色を呈し，焼成は良好，突瘤状の小突起が併用されている。

5類 (8～9)……縄文後期初頭

磨消縄文のみられるもの。8は，雲母を含み，黒褐色を呈し，弧線状の沈線による幾何学的な区画を施す。9は，長方形の区画をなしている。8は，称名寺式に比定できるであろう。9は堀之内式に比定できるであろう。

6類 (10～11)……縄文後期

双方とも，口縁に沿って，隆帯が加飾され，その上を指頭による押捺が加えられている。10は，赤褐色を呈し，11は，黄褐色を呈している双方とも焼成は良好である。

7類 (12)……縄文後期

口縁部に隆帯が加えられ，その上を竹状工具による刻目が施されている。黄褐色を呈し，焼成は中位である。

8類 (13～15)……縄文後期

底部破片である。13は木ノ葉底であって，葉脈がはっきりとみえる。14～15は，網代底である。

9類（16～19）……縄文後期
入組文風の文様がみられるもの
（16～17）は入組状の沈線によって区画された部分には縄文がみられる。18は，無文地に入組状の太い沈線がみられる。19は，隆帯の上に，刺突連点文が施されている。
10類（20～21）……縄文晩期
20は，外反する鉢形土器で，口縁に沿って，一条沈線文がみられる。器面は研磨されており，黒色を呈し，焼成は良好である。
21は，突帯上に刺突連点文が加えられており，器面は研磨されている。内面は黒色を呈し，外面は部分的に茶褐色を呈している。
10類は精製土器であって，大洞A式に比定できうるであろう。
11類（22～23）……縄文晩期
条痕がみられるもの。
22は，文様帯が二分される。沈線文によって区画された部分に，数条にわたり貝殻腹縁による条痕文が配せられている。黒色を呈し，器内は研磨されている。焼成は良好である。
23は，数条にわたり貝殻条痕文がみられ，その上端と下端には，刻目を施している。
茶褐色を呈し，焼成は良好である。
12類（24）……灰釉陶器
白灰色を呈し，高台は割合に高く，ロクロによる調整が行なわれている。

第2節　石　　器

石皿　図版17——10
1号住居址より出土したものである。
石質はもろい花崗岩で，凹みは浅い。

石匙　図版18—32
配石址より出土したものである。黒耀石製であって，やや粗雑な剝離をしている。
縦型の石匙である。
打製石斧　（33～34），（36～37）
（33，36）は配石址より，34は，第1号住居址より，37は第1トレンチより，それぞれ出土したものである。
いずれも長方形状を呈する短冊型の石斧である。
石材は33は，蛇紋岩，34，36は硬砂岩，37は，安山岩を用いている。
33の上端は雑な調製をしてあり，下端は自然面を残している。
36は，下端部が欠損している。

磨石　図版18—35
配石址より出土したもので，石材は硬砂岩を用いている。　（小池　政美）

第V章　ま　と　め

本遺跡は，昭和45年度駒ケ根市太田切ほ場整備事業にかかる，埋蔵文化財の調査により得た結果，二，三の問題点を中心として考察していきたい。

まず，第一次の調査は同年夏藤助畑遺跡に於て，第1号住居址，第2号住居址の発掘を行なったのであるが，実はそれ以前開田が行われた時3箇の住居址が発見されていたことが明らかになった。又ブルドーザーで発掘後整地した。第1号址の東断面に1箇の住居址を認めた。藤助畑遺跡に於ては合計6箇の住居址を発見しえたのであるが，このいずれもが縄文中期末葉に当るものであった。

この6箇とも20m×15mの範囲内に集合していたもので，余り時間差のない時期と考えられ，1箇の集落単位的要素を有するものであると考えられる。

上穂沢遺跡は，藤助畑遺跡の東南200m，上穂沢川に面した段丘上にある遺跡であるが，昭和20年代開田工事のため破壊されてしまった遺跡で，その内僅か2箇の住居址を認め得たに過ぎない状態である。時期は藤助畑遺跡の次に位置する磨消文を主体とする土器を出土する遺跡である。今回ほ場整備工事中，本遺跡の東方続きに多くの遺構が出土した，これは工事中の為正確の数値は得られなかったが，焼土，壁の一部，炉址等が見受けられたと工事人から知らせられたことに依っても，本遺跡は少なくも東西100m以上の集落址であったことを推定し得るのである。

上穂沢遺跡，本遺跡は藤助畑遺跡の南西 200m，八幡原遺跡に通ずる段丘突端に位置する遺跡で，現在上穂本線にて東西に分断されている遺跡である。昭和の初年頃は原野であって水田は少なかったのであるが，近年になって盛んに開田が行われた結果畑は僅かになりほとんど水田化されてしまった。開田当時住居址が相当の数認められたと聞く，今回対象になった地域は，その当時開田工事中出土した箇所を含む区域にあったので，調査の結果としては住居址等発見出得なかったが，この地域は縄文時代の集落を営むには好条件の舌状台地である。然し，上穂本線東側はほとんど原形を失なってしまったが，幸い西側斜面に相当古い地形を止めているので，今後の調査に希望をつなぐほかはない。本遺跡は藤助畑遺跡出土の土器と大差の無いところよりして，同時期頃の集落址とみてよい。

扨て，藤助畑配石址に就いて若干の問題点をあげてみると，本配石址は東西 15m，南北 8m，東南に 2% の勾配に設けられたもので，その石の数は千数百箇を数える莫大な数にのぼるものである。本配石址は，現在まで発見されている配石址と勿論類似する点も認められるが，若干相違する点があるので，本遺跡に関係のある配石址を参考として，現地において慎重に考慮した結果，まず，次の点に着目することができる。

（一） 配石址を形成している千数百箇の自然石は殆んど柱状を呈している，その数の 80% をしめていること。

（二） 遺跡地以外には，かかる石の群集は見当らないこと。

（三） 配石を仔細に見ると，幾つかの小グループが寄集まって大きなグループを作っていること。

（四） 配石の形は，円形，隋円形及び放射状形などに区別される。

（五） 石は交互に倒れている。

（六） 近傍及び附近に立石を有する遺跡があり，これ等と何らかの関係を有するものと考えられること。

以上の諸点を基として，実測図に示した1～8までを点検してみると。

1. 最初に発見された石は立ってはいなかったが，その北寄りに 15cm×20cm～40cm×30cm の不規則ではあるが，54 箇の自然石をもつ隋円形のサークルをなす一群がある。石は半数倒れた状態で出土した。

   この配石はローム層に 5cm～10cm 掘り込まれ大方は黒色土に立っているものである。

2. 1より北 4m 二重円を示す径 40cm×50cm の立石を中心として直径 2m 程，その数 69 箇の円形立石群，つまり，南側 2 のグループに属するもので，その中心の立石より四方に 1m～1.2m の長さに放射状 6 箇前後の列石が配されている。こうした円形乃至隋円形配石中に更に中心石より四方に放射状に配石した例は今迄聞かない例である。しかし，この放射状の配石が如何なる意味を有するか，古代人が方位的な，或はそこに宗教的な何ものかによった概念が存してのものか，まことに疑問ではあるが考えさせられるものがある。大場磐雄氏は「原始人が石に対して有した観念は，現今のわれわれと相当に異なるものがある。あるいは神霊の憑依する霊体とし，または神霊をまねく座と考え，あるいはそれ自体を神とあおいで崇拝する等，信仰の当体とみることは共通事例に属し，そこに石崇拝が原始宗教の一課題としてあらわれてくるのである。また，石をもって放射状にかこむのは，大湯町野中堂環状列石「特殊石組」の立石を支える形に放射状に配石したものに通ずるものがありはしないか，又はしきつめたばあい神霊のやどる聖なところ（斎庭）となり，一本の立石は神を招請する憑代ともなるものであるとのべている。北海道の類似遺跡はあきらかに墳墓とみとめられるが，関東，中部地方のものには，墳墓とするより信仰的な遺跡とみられるものがあると西村正衛氏は説いている。

   その一つに栃木県塩谷郡塩谷村佐貫の環状列石がある。ここは附近に縄文中期の敷石住居址が発見せられ，墳墓的な資料が得られなく，一つの神聖な霊域のようなものではないか。大場磐雄氏は長野県上原に於ける不明のピットについて木炭の存在等よりして，ある祭の儀式において神霊に献供されたものであろうとされた。

3. 中央部南西 3 とされている箇所にあたる一つのグループで，中心に径 80cm，高さ 50cm の本遺跡発見二番目に大きい 7 箇所に刻目のある石を中心としたグループがある。

   すぐその北側に 4 の 2 重線を施した径 20cm の立石を中心として，大 25cm×30cm～小 10cm×12cm 29 箇その径 1m の石群は，ほとんど立石である。またこの下部は 2 層になっていて上部の立石を支えている状態で，下部の石は一部ローム層に掘り込まれている。この状態は長野県茅野市尖石遺跡の与助尾根第 15 号址の例がある。

5. 本配石址の中心部にあたり，中心部二重印の 30cm×25cm×50cm の自然柱状の石をとりまく 15cm×18cm～50cm×50cm 大小 71 箇の石組直径 2m は見事なもので，この大部分は立石である。また前 4 石組で述べた如く，その基部は立石が倒れないように礫で人工的に補強したる形であった。この礫の下はローム層で，このローム層には何らの施設も認め得なかった。

6. 石組は，5の石組に北隣してあるもので，二重印を施した人頭大の自然立石を中心として大小 21 箇の円形グループをなした石組である。この中心部は実に見事な配列をなした立石が北西に向って 1.3m に配石されている。この基部もローム層との間に礫にて上部の立石を支えた様子が窺われた。

7. 石組は，北側のグループに属し，中央二重図示の径 62cm×90cm 石を円心として 10cm×14cm～20cm×45cm 大小の立石と，その内部に不規則に散在する，自然石から構成されている石組である，本組石と，5 組石との間に約 50 余箇の立石と，それを取り囲む自然石が散在する。

8. 本配石の北限に存在する大石でその長径 1.05cm×60cm，高 60cm 上面は平の石である，この石の下部はロ

ーム層に接していた。

土壙　中央部5石組の箇所を掘り下げてみると，東西2.5cm幅，長さ2mの深さ，25cmの細長い土壙が認めたのみでその土壙内からは黒色土が充満していたのみで，何物をも検出されなかった。

9.　本配石址の北西隅に発見されたもので，長径1.15m，短径85cm，深さ45cm。

10.　9の西側に接して作られたもので，長径1.8m，短径95cm，深さ50cm，9，10とも内部から細かい木炭末を検出し得たが，他には何物をも発見し得なかった。また，本両土壙は，本配石址の作られた後で作られたもので，その時期については不明である。

以上本配石址の各部に就いて一応述べたのであるが，ここで，二・三問題になる点をかかげ先学の御教示を御願いできれば幸いである。

(1)　配石の下部に土壙を有するもの。

(2)　配石下に土壙を有しないもの。

とに分類される。前者下部に土壙が存し，その土壙が墳墓になる例は，神奈川県足柄上郡大井町金子台遺跡で，一定の組石をともなうばかりでなく，居住所から区別されて設けられた，本格的な墓地である，又昭和41年3月神奈川県南足柄町，富士写真フイルム株式会社用地内，馬場遺跡縄文時代配石址にも同様な例をみることができる，他に，配石遺構の組石と類似したものは，東日本に広く分布するが，そのうち土壙を伴うことが認められる例の主なものは，秋田県，大湯，長野県南石堂，新潟県，石沢等がある，これ等は墳墓の墓標的配石址と解してよいものである。

後者は土壙を有しない配石についてであるが，長野県大町市上原遺跡，本遺跡は配石北部に十数箇の石積と数個のピットがある，石の下部より木炭が出土した，明らかに人工的遺構である。時期は本遺跡より古く縄文前期諸磯式の遺物を有する遺跡であって墳墓としてではなく，信仰関係の遺跡とされている。また長野県埴科郡戸倉町幅田遺跡に於ても，祭祀遺跡か，墓地様相と云うより祭祀的の要素の強いものとされている。

終りに立石を伴う配石址についてであるが，現在知られている遺跡は次の様である。

青　森　県

下北・東通・尻屋，立石（時期不明）

岩　手　県

江刺・稲瀬・樺山，立石（中期）

秋　田　県

仙北，西明寺，八津，立石（晩期）

仙北，西明寺，袖野，立石（中期）

由利，矢島，鮭石，立石（中期）

鹿角，大湯，万座，立石（後期）

鹿角，大湯，野中堂，立石（後期）

東　京　都

世田ケ谷，祖師ケ谷，大蔵，石棒（中期）

神奈川県

中，奏野，寺山，立石（中期）

伊東，岡，赤坂，立石（中期E）

静　岡　県

加茂，下河津，見高，石棒立（中期）

吉原，上ノ段，石棒（中期）

富士，鷹岡，立石（中期）

庵原，富士川，立石（不明）

山　梨　県

南都留，道志，池ノ原，立石（晩期）

北巨摩，日野春，長坂上条，立石（晩期）

長　野　県

茅野，与助尾根，立石（中期E）

下諏訪，小田野，駒形，石棒立（中期）

諏訪，片羽上，立石（中期E）

諏訪，富士見，曽利，立石（中期E）

駒ケ根市　東伊那，山田，石棒立（中期）

伊那市　富県，御殿場，石棒立（中期）

上高井山田，坪井，立石（中期E）

小県，大門，明神原，石棒立（中期E）

埴科，坂城，入山C，立石（中期E）
埴科，戸倉，幅田，立石（中期E）
東筑摩，四賀，井刈，立石（中期E）
木曽大桑，大明神，石棒（晩期）
駒ヶ根市中割，藤助，立石（中期）

以上，立石20箇所，石棒立7箇所を数える。本遺跡の近くには，先に記した駒ヶ根市東伊那，山田第1号住居址の配石を伴う石棒と石棒近くに土器の底部を埋めてある例，大場磐雄氏は上伊那郡伊那村遺跡第1次調査概報のなかで，石棒樹立に接して炉があり石棒も火を受けている，大炉は暖房用小炉は炊事用と考えられた。また考察のなかで，宮坂英弐氏の尖石，八幡一郎，矢島栄一両氏の報告に係る相模寺山遺跡，大場磐雄氏の伊豆見高遺跡，宮崎糺氏報告甲斐国大塚遺跡等があり信仰の表徴と見たいが，伊那村の例の如く火にあっているところより実用説を主張する根拠もそれ程強くなく，この考えについては暫く断定を避けておきたいと結んでいる。

伊那市　富県，御殿場遺跡，第5号址に角柱状の自然石厚さ6cm，幅9cm，高さ34cm，床面上13度の傾斜をもって立っていた。藤沢宗平氏は，大場磐雄氏のあげた例の他に富士見町藤内7号址，同曽利7号址，大畑第6号，第8号，東筑摩郡朝日村熊久保第5号址，上高井郡山田坪井遺跡を例にあげている。

上伊那郡宮田村，中越遺跡縄文早期未前期初頭，昭和43年度調査は，藤森栄一氏が担当された，第14号住居址の北壁によりかかる様に長さ35cm，角形をなした石棒が発見されている。

今回の調査で特に注意したいのは，藤助畑遺跡第1号住居址の立石である。私は，藤助畑の配石遺構を見て直観的に，以上一連の立石の持つ意味がここにあると思ったのである，さらに本住居址内の立石の脇に打製石斧の立っているものを見てなお更に，立石に対する意味が，常に居住内外に於て深い信仰的ななにものかをもっているものであることを。

中割原遺跡・本遺跡は山麓と平地の境に発見された遺跡である，下村忠比古氏は太田切城に附属する遺構ではないかと考え調査したのであるが，今回調査した積石塚での調査結果では，太田切城についての遺構として位置づけることは，今後の資料の増加によらなければならないことであるから，この度は，積石塚一基を中心として僅かな調査に終ってしまい，問題はむしろ今後の調査にまたなければならないので，所見は後日にゆずることにした。

（友野　良一）

春日・旧八幡社跡遺跡

目　　次

目　次　　p. 34

凡　例　　p. 34

第Ⅰ章　遺 跡 の 環 境　　p. 35～36

第Ⅱ章　発掘調査の経過　　p. 36～38

第Ⅲ章　遺　構　　p. 39～42

第Ⅳ章　遺　物　　p. 42～53

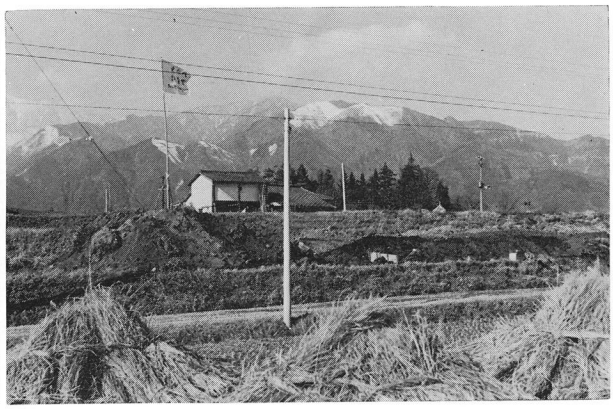
第Ⅴ章　集落の復原　　p. 53

第Ⅵ章　八幡原遺跡　　p. 53

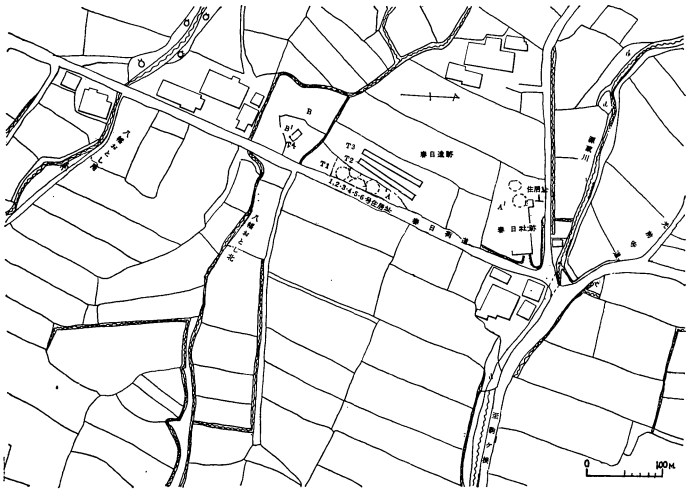
第Ⅶ章　ほ場整備の記録保存をおえて　　p. 53

凡　　例

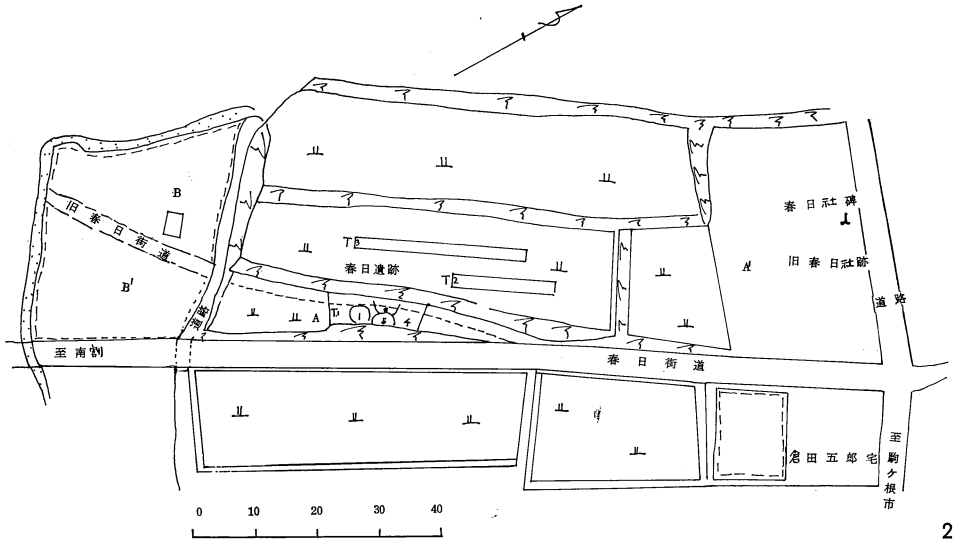
1. この調査は，太田切ほ場整備事業に伴う記録保存のための緊急発掘調査で，事業は南信土地改良事務所の委託により，駒ケ根市教育委員会が実施した。
2. 本調査は昭和45年度中に報告書提出の義務を要するため，図版を主体とする調査報告書とし，文章記述もできうるかぎり簡略にし，考察にあっては，資料の再検討のうえ後日の機会にゆずることとした。
3. ほ場整備事業が今後幾年かに亘って実施される予定であるので，第一次報告書，第二次報告書として，順をおって報告する。
4. この報告書の写真撮影は，福沢正陽，吉村進，友野良一，小池金義があたった。執筆及び図版作製は，遺構（吉村進），遺物（小池政美），環境（下村忠比古，福沢正陽），保存処置（小池金義），集落の復原（友野良一），が担当した。



図版 1 (1)　春日社大明神跡　　(2)　春日遺跡東方より



1



2

図版 2　1 春日遺跡地形図　2 春日遺跡実測図

第I章　遺跡の環境

第1節　遺跡周辺の自然環境

春日遺跡は駒ケ根市赤穂中割の八幡原部落のほぼ中央西北の旧春日社の段丘より東傾斜にあり，飯田線駒ケ根駅から西南に 3.2km，国道 153 号線添い赤穂中学校からやや西南 2km のところに旧稚蚕所があり，この南側段丘上に，春日大明神を祭る旧春日社があった。その前を文録 2 年に着工し慶長 13 年に漸く竣工を見た。幕府の財政政策の一環として飯田藩が幕府の指令により，執権職春日淡路守が専ら工事の指導監督にあたった。世に，春日街道と呼ばれる道路添いと，現在東側に現道を移した間に狭まれたやや東南東傾斜の桑畑から田にかけての狭隘な地点に位置している。

なお段丘南側を八幡おとしが流れ，北側には源蔵川が流れている。標高 729m をなす本遺跡に立つと，西に秀麗豪快な西駒ケ岳を中心に銀屏風のごとく連なる高峰中央アルプスを仰ぎ，東方にはしぶき上る天竜川を隔てて主峰北岳を初めとする仙丈岳，赤石岳等の連なる南アルプスを眺め，北空遠くかすむ立科連峰等々，風光明媚な環境である。伊那盆地は，日本の背梁山脈としての，中央アルプス，南アルプスの二大山脈の間に形成された縦谷状の地形で，その中央に位し，その附近大田切扇状地の今椰山山麓には U 字渓の谷間があり，昔から良質の湧水を求めて動物どもの集った所とも思われる刈倉という地名がのこる程住みよい所であったろう。又以前遺跡西側には相当大きな森，社殿，鳥居等，神社としての風格を持った春日社が，仙丈岳，又富士をも願望しつつ鎮

座していたが，時代の変遷と共に明治42年の内務省告令により神社合祀がなされ，現在は旧春日社遺跡の碑が北側稚蚕所跡にぽっつりと残されるのみとなった。

この頂部台地から東傾斜地に掛けて，段々開発が行なわれ，一時普通畑，又桑畑となっていたが，戦後行なわれた開田の際に埋甕等も出土しており，又現道東側にも，開田途上に石囲炉址が多数発見されているところから，台地上より東傾斜又東方にかけての約20 ha位に大きな集落を形成し遺物も多く散布していたが，この広大な遺跡も開発に伴いその一部を発掘したのみで，その全貌を明らかにすることができないが，せめて残された箇所の調査を必要とされよう。

第2節　地形及び地質

中央アルプスの主稜を構成する西駒ケ岳に源を発する大田切川，空木岳に発する中田切川等が東流して天竜川に注いで，おる河川に沿って扇状地や段丘には，天竜川の本流によって，堆積されて段丘化したのか，扇状地として形成されたものが，段丘化したのか判定しがたい地形が顕著に発達している。これ等の地形を構成する礫層を調べてみると，中央アルプスの主稜を構成する花崗岩類，変成岩類，片麻岩類等があり，この礫層の中には径50cm～20cm内外の礫が存在することから，これら扇状地は，大田切川によって形成されたものと考えられる。この扇状地の扇頂部の標高600m，800m付近には，高位段丘があり，これらの地形上には，集落や水田が発達し伊那盆地の中部米作地帯となっている。

このように赤穂地区は大田切川の扇状地が3分の2を，又中田切川の扇状地が3分の1を持ち，この接点が上穂沢川であり，この扇状地へ今梛山系より発する鼠川又その支流の小河川による複合扇状地を構成し，主としてこの河川に臨む段丘の突端の東南東傾斜には縄文，土師期文化が発達している。

地層は耕土約40cmが又その下部に漸移層が10cm内外の厚さを示し，やや明るい褐色がかった軟質粘層（ソフトローム）が厚さ40～50cmが存在する，この下部に，いわゆるハードロームがきわめて固く厚い堆積をみせているこれが住居址の床面である。　（福沢　正陽）

第Ⅱ章　発掘調査の経過

第1節　調査に至るまで

昭和45年7月から実施した県営ほ場整備事業大田切地区（昭和45年度分）第Ⅰ次埋蔵文化財緊急発掘調査につづいて，春日遺跡・旧八幡社跡遺跡一帯の調査を委託したい旨，11月12日に南信土地改良事務所より依頼を受けたので，友野良一氏と調査団の編成，時期等について協議し，11月28日，市当局，市教育委員会と協議の上，第2次調査として実施することに決定。南信土地改良事務所に調査の受諾を回答すると共に，第Ⅱ換地工区小平委員長に同行を願い，博物館関係者（小池・友野・下村・福沢）により現地調査を行ない，12月3日より着工することを決定，12月1日に南信土地改良事務所長と駒ケ根市長との間に委託契約を締結，前回に準じて実施することとし，12月2日，県教育委員会に調査の着工について連絡し，指示を得たので次の編成により3日から調査をはじめた。

第2節　調査の組織

◦県営ほ場整備事業大田切地区（昭和45年度分）第2次埋蔵文化財調査事務局

小池　金義　　駒ケ根市立駒ケ根博物館長
福沢　正陽　　駒ケ根博物館（現場責任者）
武蔵　法子　　〃

◦調　査　団

団　長　　友野　良一
調査員　　小池　政美　　国学院大学学生
〃　　吉村　　進　　明治大学学生
特別参加調査員　　根津　清志（長野県考古学会会員）
〃　　福沢　幸一（　　〃　　）

発掘調査は12月3日から13日まで現場で行ったが，調査を実施するに当って，調査団員，倉田正義氏ほか地主，土地改良区関係者，竹花工業，赤穂高校，赤穂中学校生徒，地元協力者等々をはじめ，多くの方々のご協力とご配慮によって，ここに初期の目的を果たして調査を終了することができました。関係者の献身的なご努力に心からお礼を申しあげる次第です。　（小池　金義）

第3節　発掘作業経過

12月3日（水）曇のち雪　　午後・小池館長・吉村進発掘現場の下見・附近の表面採集行なう。途中雪のため中断し，附近の農家で話をきく。

12月4日（金）曇風強し　　午後，春日社遺跡地点，桑畑内を試掘する。表土下20～30cm位で頭大の石に混って土器片が出土する。遺物包含層は20cm位である。土器片は中期の土器片がほとんどで押型文が二片出土する。

参加人員　　調査員　吉村　進，事務局　小池館長・福沢正陽

12月5日（土）晴　　午前中は，桑畑と田との境界を試掘する。作業前日同様はかどったが，遺構はあまり確認されない。午後友野団長，遠影写真撮影を行ないつつ現地到着し調査に加わる。小池館長，友野団長とで春日社跡の試掘行なう。表土下50cm位に砂質のタタキの面が発見され，遺構かと思われたが，附近の農家の人の話によると稚蚕所を掘った際の盛土とわかり落胆する。

12月6日（日）晴　　作業開始　7時30分

本日より，本格的な調査を初める。竹花工業よりの心使いにて，中太ブルドーザーにより，桑畑の表土除土及びあぜはずしを行なう。

続いて11時より団長のもとに鍬入式を行なう。午後排土のあとを整地し，南側から除々に調査を進める。まもなく集石群にぶつかりそのため調査はばまれる。加曽利Eを中心とした土器片が集石間にはさまれて多量に出土する，従って遺構の凝いもたれ集石の慎重なる調査が必要。作業終了　4時。

参加人員　　調査員　吉村　進・友野良一，事務局　小池館長・福沢正陽

12月7日（月）晴　　作業開始　8時30分

昨日発見された集石を清掃し，写真撮影及び平板測量を行ない，下部の調査を行なう。しかしながら，集石は二重・三重に重なり合い土器片の出土も多量のため，調査困難をきわめる。作業終了近くになって西側に黒色土の落ち込みが認められたので，一部の集石を取りあげて調査を行なったところ，ロームに掘り込まれた床面を確認し住居址と決定することができたが，散在する集石の性格については，なお不明である，本日の出土遺物は昨日と同様中期の土器片が多量に出土する。作業終了　4時30分。

参加人員　　調査員　吉村　進・友野良一，事務局　小池館長・福沢正陽，作業員　5人

12月8日（火）雪あれ　　作業開始　8時30分

前日に引続き，住居址の調査を行なう。集石は床面との間に10cm程の黒色の覆土をもち，遺構とは直接の関係がないことが確認されたため，集石は取り除いて住居址の調査を本格的に初める。午後集石の下より石組みの炉が発見される。しかしながら，住居址の壁は西側で発見されただけで不明である。東側はトレンチ外，南側はイモ穴の撹乱のため期待がもてないので，特に期待は，北側に集中される。しかしながら，北側床面はほぼ同一レベルで更に北に伸び複合住居址か拡張を考える必要が出てくる。炉の東側より深鉢の半完形品が出土し，大いに意気あがる。作業終了　4時30分。

参加人員　　調査員　吉村　進・小池政美，事務局　小池館長・福沢正陽，作業員　7人

12月9日（水）晴風やや強し　　作業開始　8時30分

今日より中央道調査員根津清志・福沢幸一の両氏調査に加わる。

発見された住居址北側集石群下部の調査にかかる。礫は三重に重なり合い深さ60cm位まで達し，住居址床面より，低いレベルからも発見され，新たな住居址の発見にも可能性がでてくる。第1トレンチの北端に住居址の壁が確認される。規模から考えるに3箇以上の住居址の複合関係が考えられる。作業終了　4時30分

小池調査員帰京。

参加人員　　調査員　小池政美・吉村　進，事務局　小池館長・福沢正陽，作業員　7人

12月10日（木）晴　　作業開始　8時30分

住居址が複合状態であるので調査はきわめて困難である。一号住居址北に2号，更に3号住居址と続いて発見されたが，床面はほぼ同一レベルで繋っている。3号住居址床面レベルより20センチ程下部北側から4号，東側から5号住居址が部分的に発見される。3号住居址より深鉢の完形品が出土する。作業終了　4時30分

参加人員　　調査員　吉村　進・根津清志・福沢幸一，事務局　小池館長・福沢正陽，作業員　6人

12月11日（金）晴　　作業開始　8時30分

3号住居址の平板実測を行ない，貼り床部分をこわして下部の住居址の調査を行なう。午後北沢教育長，庶務係長現地見学に来る。住居址が全面的に発見される。4号住居址を6号住居址が周溝によって切り，更に5号住居址が4，6号住居址を切っている。4号住居址より藤内式の半完形が出土し，貴重な資料となる。作業終了4時30分。

参加人員　　調査員　吉村　進・根津清志・福沢幸一，事務局　小池館長・福沢正陽，作業員　6人

12月12日（土）晴　　作業開始　8時30分

昨日に引続いて住居址の調査及び清掃を行なう。続いて写真撮影を行なう。

中日新聞，信毎新聞，伊那毎日新聞社取材のためくる。午後より一部団長とともに旧八幡社跡を発掘する。中期土器片数片と打製石斧四点出土する。作業終了　4時30分。

参加人員　　調査員　小池政美・吉村　進・友野良一，事務局　福沢正陽・小池館長，作業員　5人

12月13日（日）晴　　作業開始　8時30分

昨日までに発掘された住居址の平板測量とともに附近の地形測量を二班に別れて行なう。一部春日社遺跡A地点を発掘するも，土器1片のみ出土する。

第2次の発掘調査の全日程を終了し，4時より，博物館にて報告書打ち合せを行なう。

参加人員　　調査員　小池政美・吉村　進・友野良一，事務局　福沢正陽・小池館長，作業員　2人

12月18日～12月24日

遺物整理及び報告書原稿書き。

1月7日～10日

報告書図版整理。

協　力　者

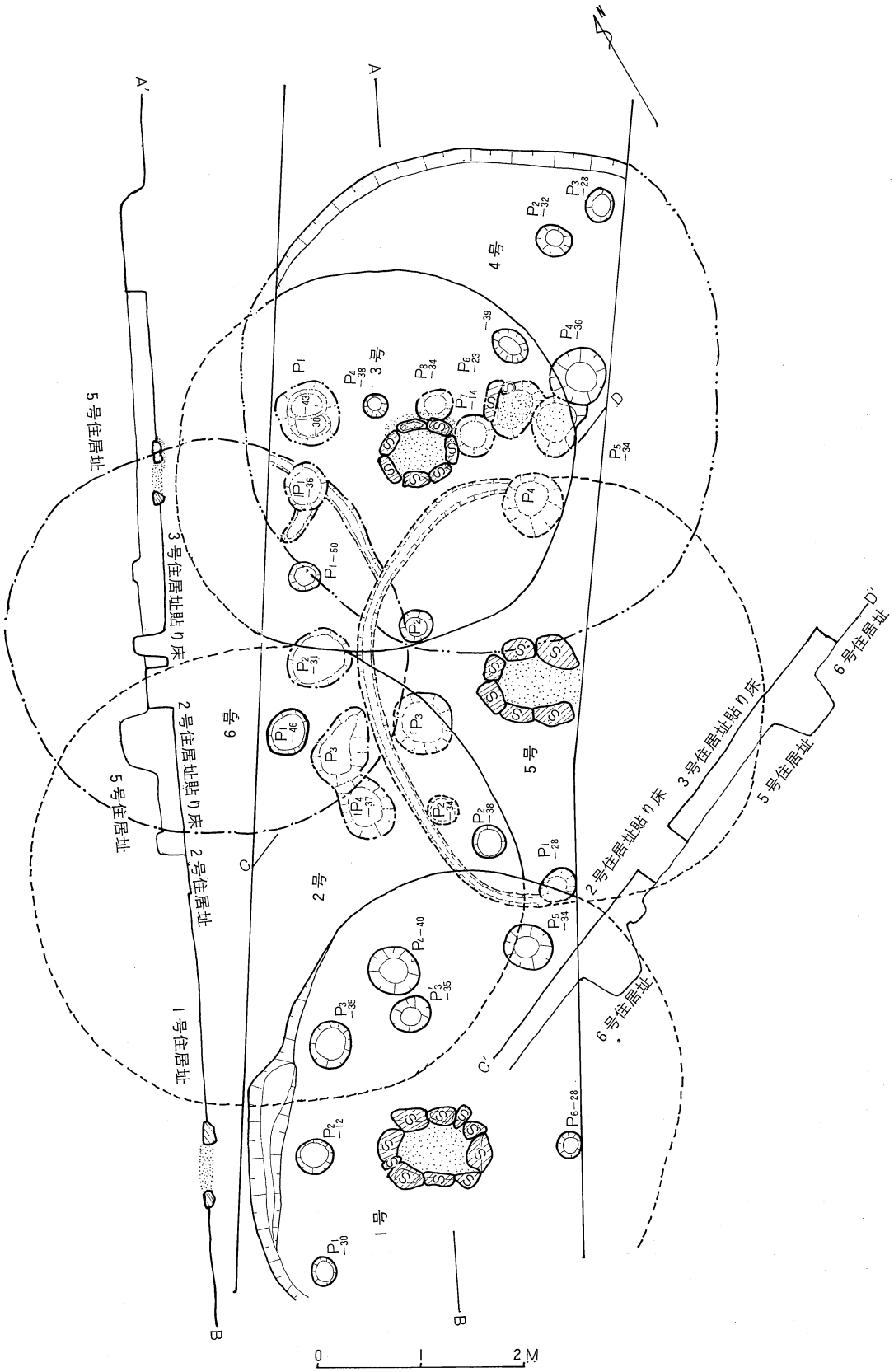
倉　田　正　義　　田　中　はる子　　小松原　泰　幸（赤穂中生徒）
〃　節　子　　山　本　清　安　　気賀沢　利枝子（市教委）
〃　日出平　　堺　沢　かめよ
〃　源　重　　下　村　　修（赤穂高校生）

根津清志，福沢幸一両氏には忙しい中を調査に参加していただき，心から感謝するものです。

(1)

(2)

図版 3　発掘風景　(1) 春日遺跡　(2) 旧八幡社跡遺跡



図版 4　春日遺跡遺構実測図

第Ⅲ章　遺構（春日社遺跡住居址）

本遺跡は，調査区域が地形的にも，限定されていたため，今回の調査は3.5m幅のトレンチによる発掘を行なった。住居址を完掘することができずに終り，不十分な調査となってしまった。

住居址中には流出してきたと思われる頭大からこぶし大の大きさの石が重なり合い，その石の間に土器片がはさまった状態で出土し，今回の調査で出土した土器片の大半は他の遺跡からの流出によるものと思われる。住居址中より出土した土器片のうち各住居址に伴なうものは少ないであろう。今回の調査で発見された住居址は6基をかぞえるが，全て縄文中期に属するものであり，各々の住居址の時間的差異はあまりない。以下各住居址の概要を述べることとする。

第1号　住　居　址

この住居址は，遺跡の南端に位置し，最初に発見された住居址で表土下45cmローム層を30cm切り込んである。壁は西側で確認され，壁高は30cmである。住居址北側は，2号住居址の床面に幾分の傾斜をもって続いており，土器からみると2号住居址を切っているものと思われるが，1号，2号の複合関係は，はっきり確認するまでには到らなかった。

又2号住居址の東側で部分的に5号住居址と複合関係を示し，5cm程の貼り床が施されている。更に住居址南側は炉の横から「イモ」穴の撹乱のため壁は確認することができなかった。

規模は4m位の円形をなすと思われる。炉は中央よりやや西側に扁在している。花崗岩の長さ30cm位の細長い石を用いて，床面を5cm位掘り込んで作られている。炉の大きさは長径1.1m，短径0.7mの卵形である。焼土の堆積は，10cm位である。

柱穴と思われるものは全部で7ケ認められたが，P_3'（P_4南）は2号住居址に属すると思われる。P_2とP_6, P_4とP_5が対比され，柱穴は8本であろう。床面は西側附近では良好であるが東側では軟弱である。

炉の東側より曽利Ⅰ式の深鉢が床面直上より出土しているため，住居址の時期も同時期と思われる。

第2号　住　居　址

この住居址は，1号住居址と南側で切り合い関係を示し，5号，6号住居址とは8cm位の貼り床で複合している。更に北側は3号住居址とほぼ同一レベルの床面をもって接っしている。しかしながらこの両者の複合関係は明らかにすることはできなかった。これを土器からみると，一型式3号住居址が古い時期であるが，時間的にはほんのわずかである。

柱穴は整然としており，三つ認められた。炉は調査区域よりは発見されなかった。トレンチ西壁よりから井戸尻Ⅱ式に比定されると思われる把手が出土しているため住居址の時期も同時期としてよいだろう。

第3号　住　居　址

この住居址は，4・5・6号住居址にまたがって全面貼り床を施してある。貼り床は下の住居址より20cm程あり8cm位の貼り床である。

住居址西側は，トレンチ外のため，推定3.7m前後の正円形をなすものと思われる。炉は中心より，やや東側に扁在している。花崗岩質の細長い石を用いて，床面を若干掘りくぼめて作られている。大きさは長径0.7m，短径0.5mの卵形である。焼土は10cm前後の堆積を示し，北側では焼土が炉址外にもみとめられた。

Pitは全部で4ケ確認されたが，P_4は柱穴とは考えられない。更にPitの配列からみると4号住居址のP_1，5号住居址のP_4がこの住居址の柱穴に使用されたとも考えられる。

炉址西側P_1, P_4の真ん中あたりより井戸尻Ⅲ式に比定される深鉢が出土しており，住居址も同時期と思われる。

第4号　住　居　址

この住居址は，トレンチの北端に位置し，発見された住居址中，最も古い時期に属するものである。住居址北側はローム層を25cm程掘り込んであり，南側は5号，6号住居址によって切られている。床面は全体にロームを堅く踏みかためてあり，良好である。

炉址は住居址のほぼ中央に位置し，長径0.5m短径0.4mの不正円形の穴P_6を掘り，穴に接して床面上に花崗岩質の細長い石を置いただけの簡単なものである。炉址P_6内には，焼土と共に多量の炭化物が検出された。更に，炉P_6に続いているP_5よりも焼土及び炭化物が発見されており，住居址の建て替えに伴なう炉の移動も考えられる。

この住居址に直属すると思われるPitはP_5, P_6を除いて全部で6ケ発見された。このうち柱穴と考えられる

のは P_1, P_2, P_3 の三つである。住居址東側が未掘，更に，南側が他の住居址によって，切られているため，柱穴の存在が問題であるが，P_1 が2穴である点，住居址東側にある P_2, P_3 を考えると炉址の点からもしてこの住居址は1回以上の建て替えを推察することができよう。

炉（P_6）北側，P_1, P_2 の真ん中床面直上より，藤内式に比定され得る土器がつぶれた状態で出土している点からして，この住居址も同時期と考えられる。

第5号 住 居 址

この住居址は北側で4号，6号住居址と複合しており，深さ5cm前後の周湟によって切っている。その上に3号住居址の貼り床が施されている。南側は2号住居址の貼り床が施されている。周湟が回っているが壁ははっきりとは確認できなかった。床面は4号住居址同様，堅く踏み固められており，良好である。

大きさは長径4m，短径3.5m前後の楕円形を有すと思われる。炉はトレンチ東壁わきに発見され，住居址のやや西よりに扁在する。

花崗岩質の長さ，30cm前後の扁平な石を用いて作られており，炉石は床面を掘りくぼめてあって，炉石の上面は床面とほぼ同一レベルである。大きさは長径1m，短径0.8mで，東側には炉石がなく，U字形の炉である。焼土の堆積は10cm前後である。

Pitは周湟にそって4ケ発見されたが，柱穴と思われるものは，P_1, P_3, P_4 の3つであろう。

住居址より多量の土器片が出土したが，他からの流れ込みがあるため，この住居址の時期を土器の面から決定することは早計であろう。住居址の複合関係からみると5号住居址（藤内式）と3号住居址（井戸尻Ⅲ式）の間である。

第6号 住 居 址

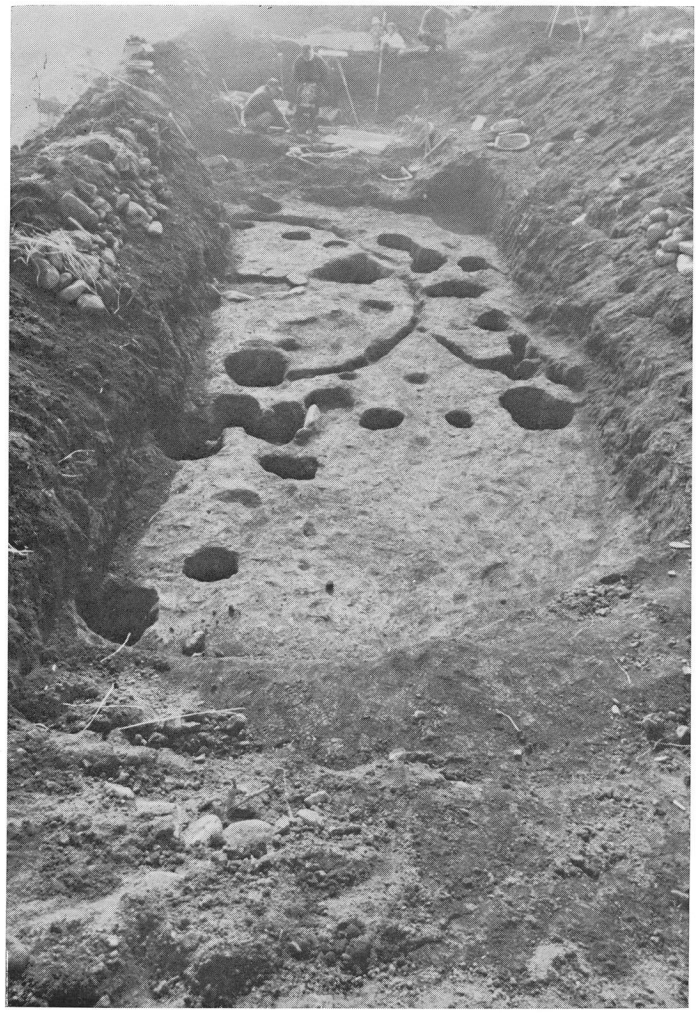
この住居址は，東側3分の1程が発見されただけにとどまり詳細は不明である。北側は4号住居址を深さ3cm程の周湟によって切っており，東側は5号住居址によって切られている。更に床面上20cmに2号，3号住居址の貼り床が施されている。南側には周湟は確認されず。壁もはっきりと確認することはできなかった。最終的に2号住居址床面を6号住居址の床面と同一レベルまで落としてみたが遺構らしきものは発見できなかった。炉址は調査区域内よりは発見されなかった。規模は不明であるが，円形をなすものと思われる。Pitは全部で4ケ発見されたが，住居址の大部分が未掘のため柱穴については不明である。

5号住居址同様，時期を決定できうる土器がないため不明であるが，複合関係より，5号住居址と4号住居址の間にくる，井戸尻Ⅰないし，藤内式であろう。

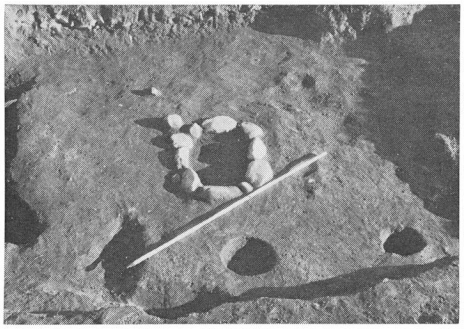
以上，各住居址毎に述べてきたわけであるが，住居址の編年的位置づけは次のようになる。

4号住居址（藤　内　式）
6号　〃　（　　〃　　）
5号　〃　（井戸尻Ⅰ式）
2号　〃　（　〃　Ⅱ式）
3号　〃　（　〃　Ⅲ式）
1号　〃　（曽 利 Ⅰ 式）

（ただし，5号，6号は複合関係から仮に土器型式を分けたため，実際に，一型式の差が両者に認められるかは不明である）　　（吉 村　進）



図版5　住居址（4，5，6号）北側より



1

2

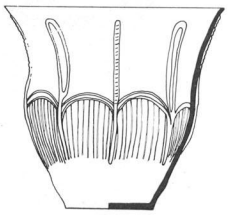
3

図版 6

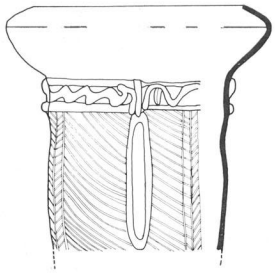
1　1号住居址（西より）

2　4・5・6住居址（北より）

3　　〃　　（東より）

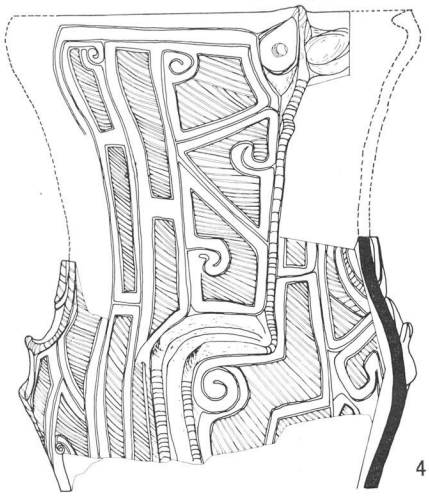


1



2

3



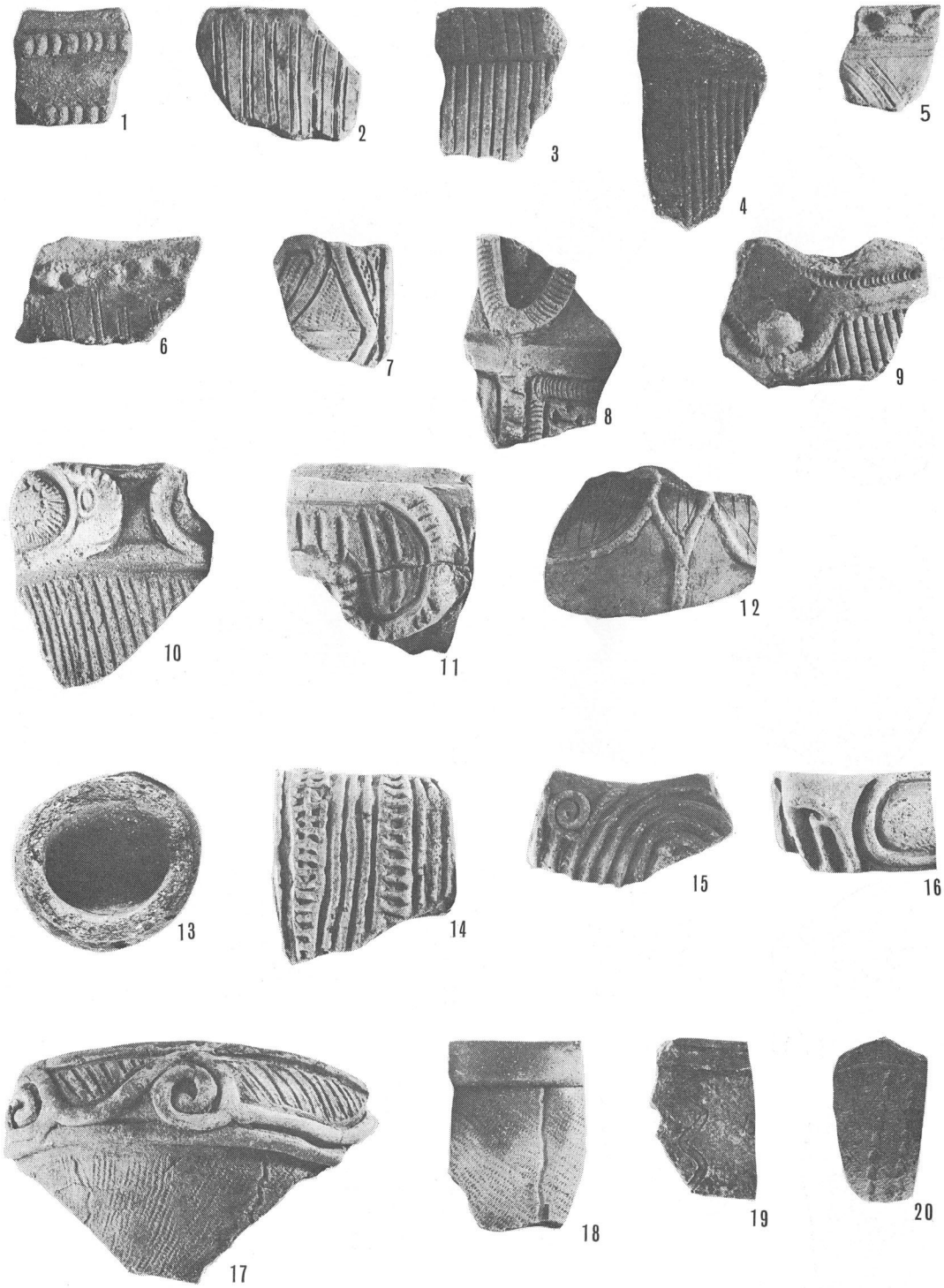
4

図版 7　土 器 実 測 図

1—3号，2—1号，3—2号，4—4号

住居址出土

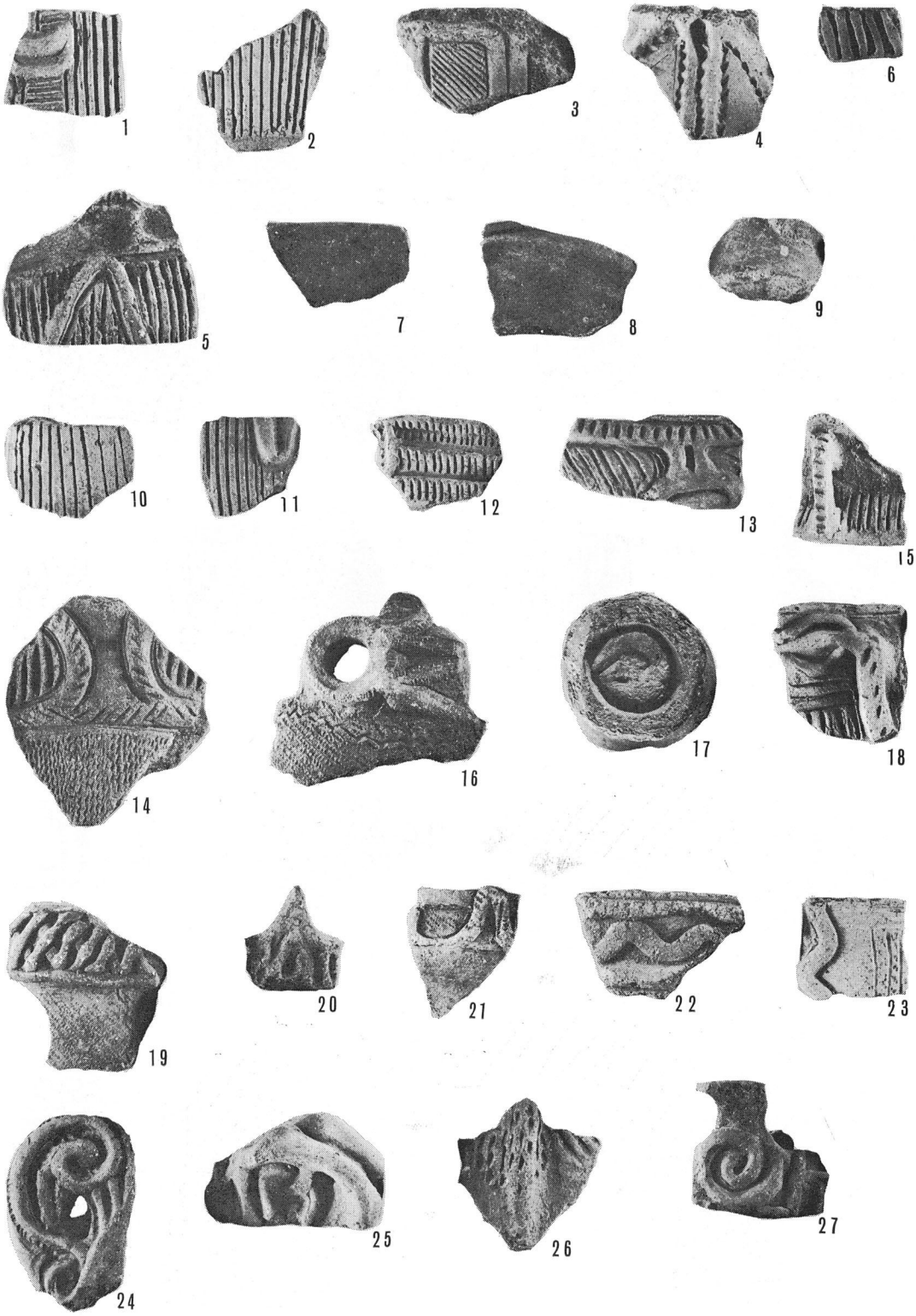
1，2，4—S＝$\frac{1}{6}$



図版 8 土 器 片 写 真

第1号住居址　S＝$\frac{1}{3}$

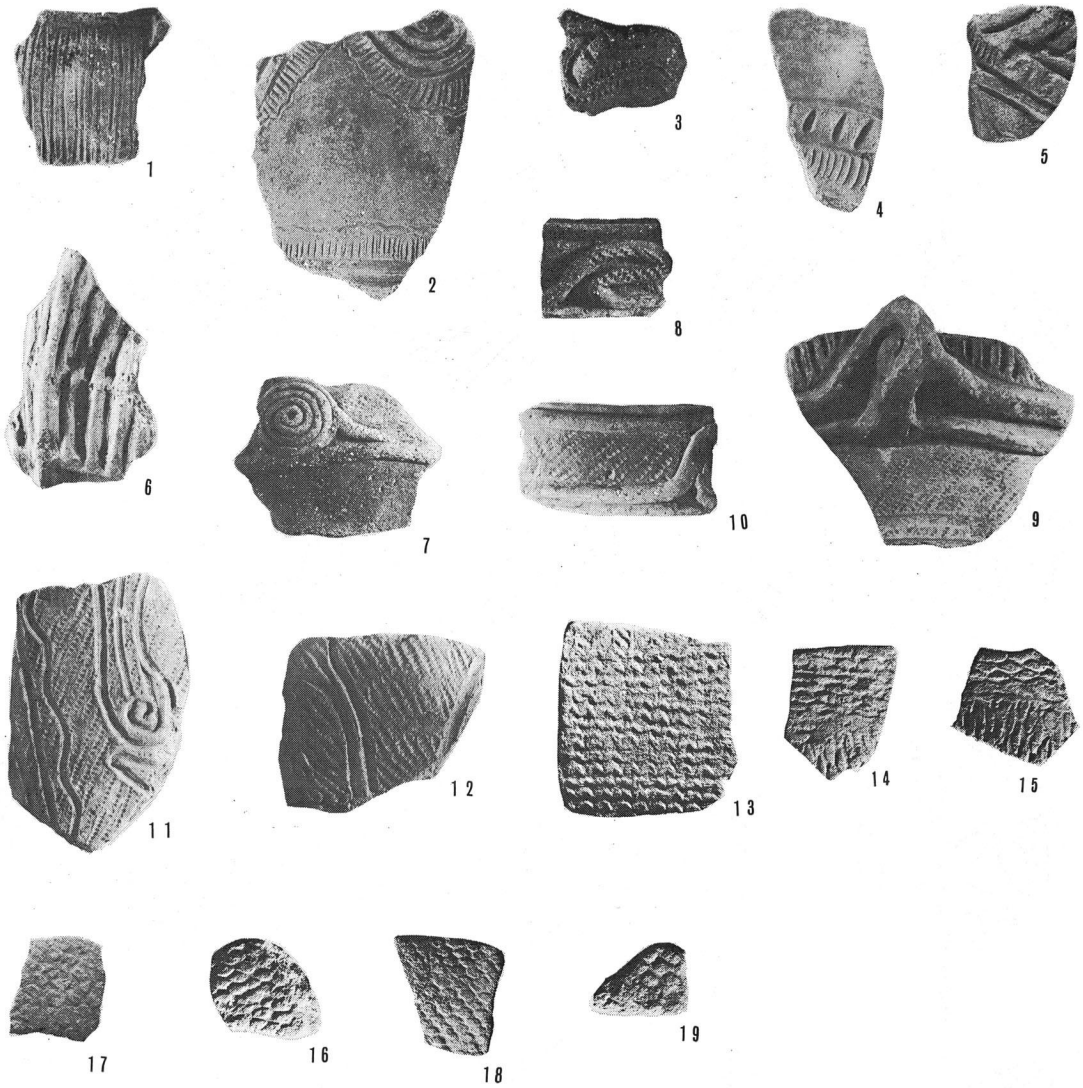
注　住居址中より，二千点近い土器が出土しているが，多量の流れ込みがあるため，各住居址より出土した土器がすべて住居址に直属するものではないので，住居址の時期決定にあたっては床面直上より出土した完形品に近いものしか扱っていない。後述する土器の項には時間的に違うものも含まれている点承知してほしい。



図版 9 土 器 片 写 真

1～9　第 2 号住居址出土　　10～27　第 3 号住居址出土

$S=\frac{1}{3}$

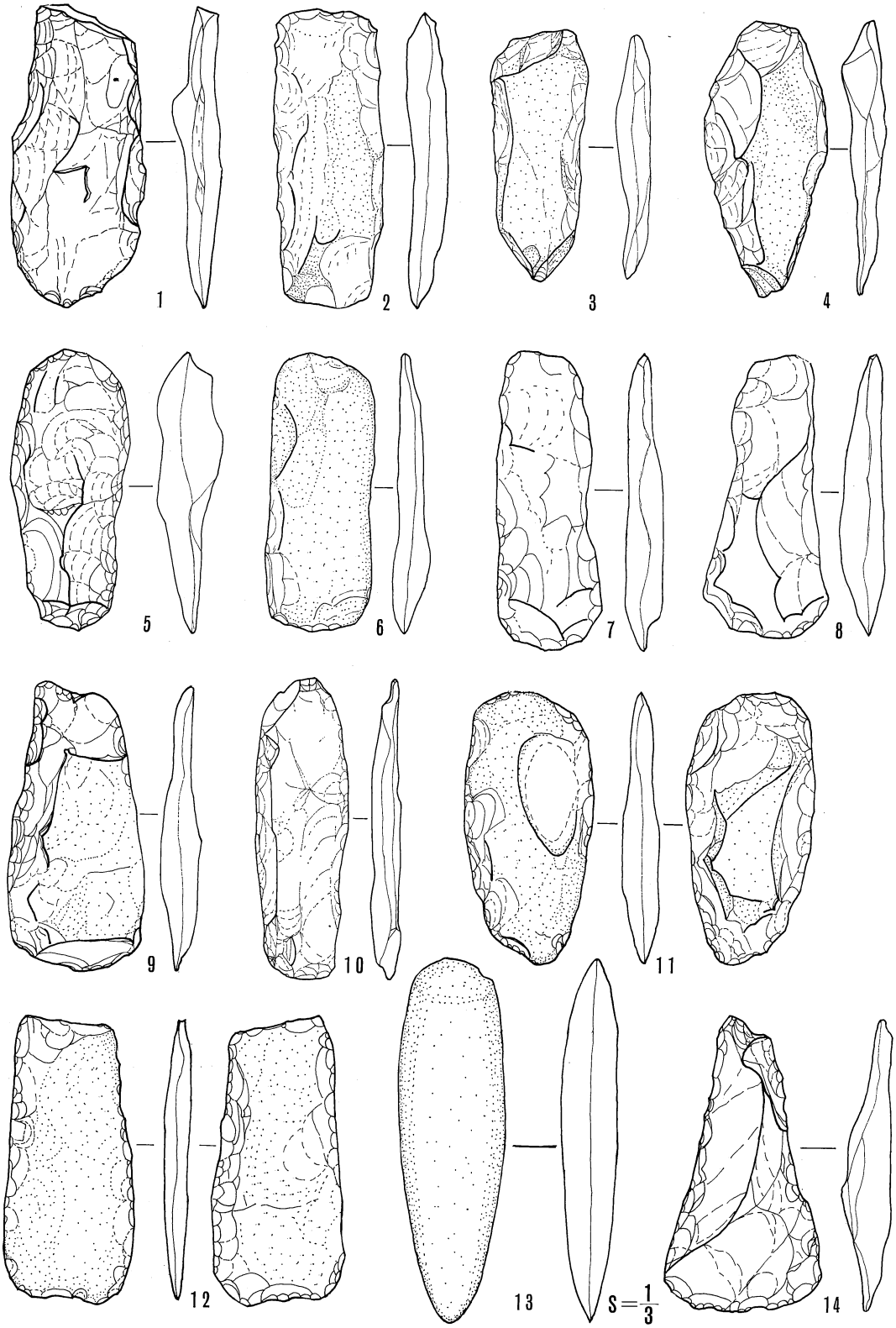


図版 10 土器片写真

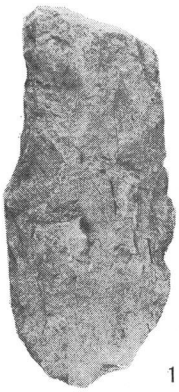
1～8　4号住居址出土　　9～12　5・4号住居址出土　　13～19　表土内採集

1号住居址出土

3号住居址出土



図版 11


1

2

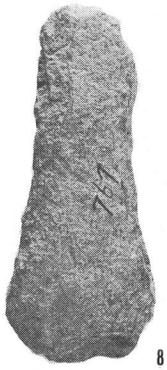
3

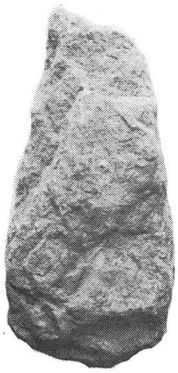
4

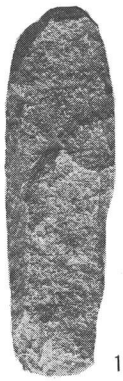
5

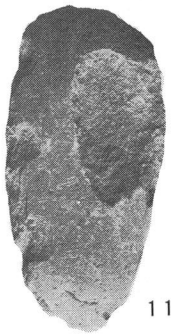
6

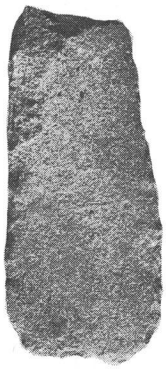
7

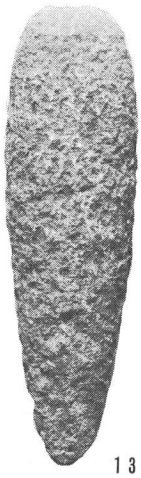

8

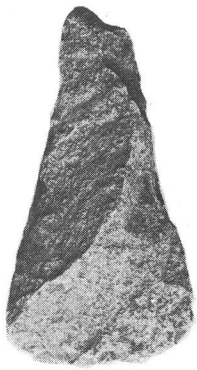

9


10


11

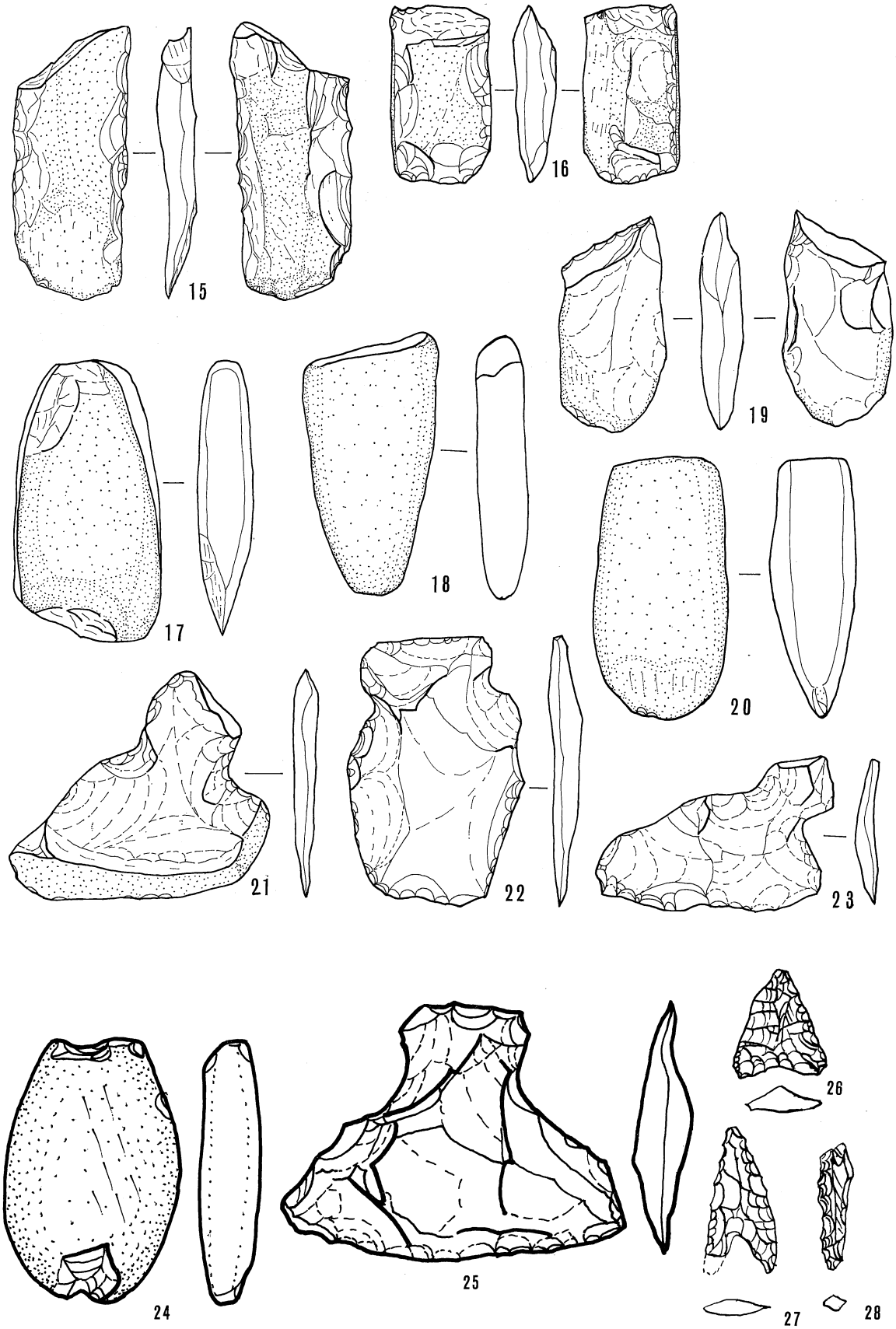

12

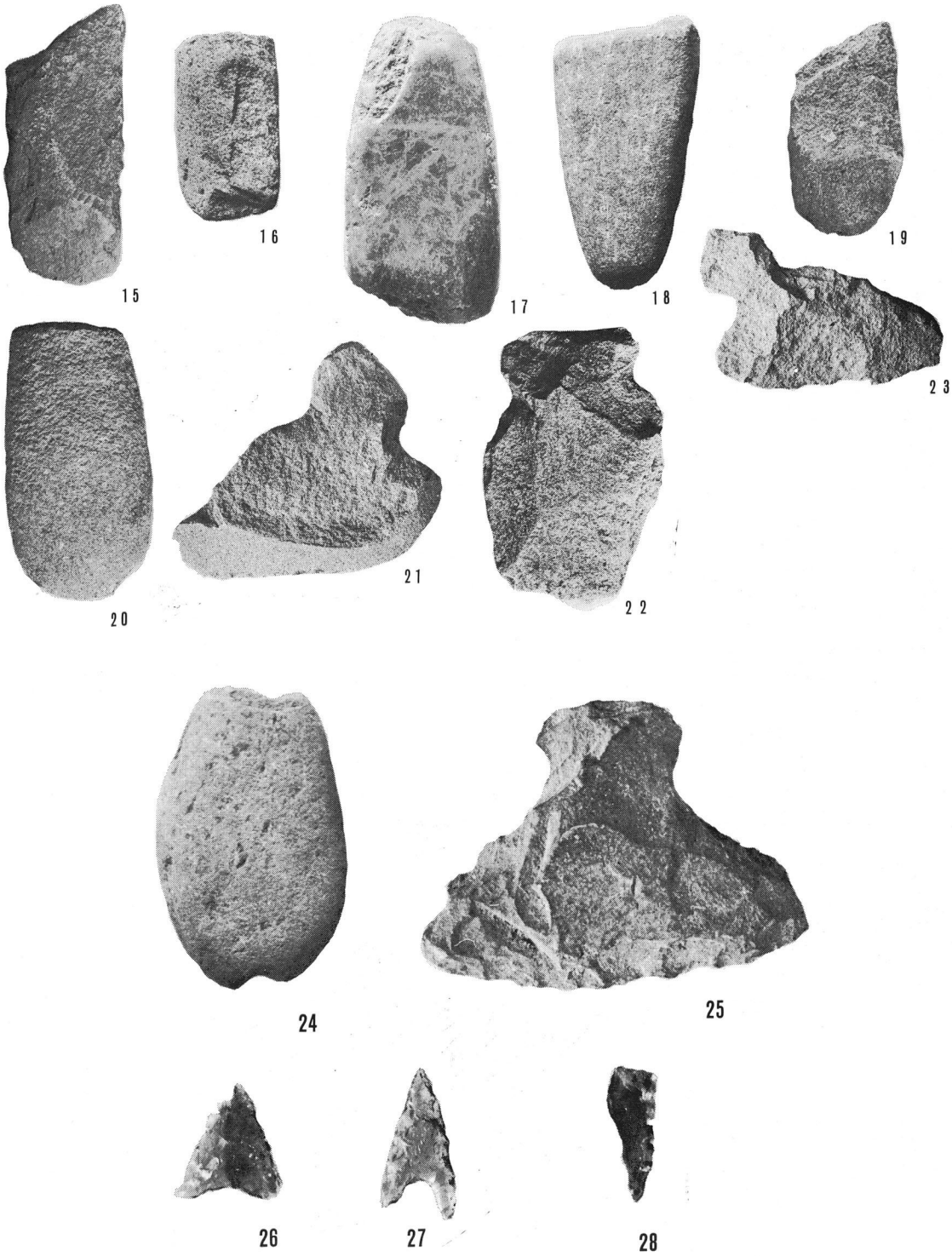

13


14

石器実測図及び写真

$S=\frac{1}{3}$


15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28



図版 12　石器実測図及び写真

$S=\frac{1}{3}$

1～15，21—1号住居址　16，24—2号住居址　11，22—3号住居址　18—八幡原採集
19—旧八幡社　20—八幡原上原（佐野氏蔵）　23—6号住居址　25～28　5号住居址

第Ⅳ章　遺　　物

第1節　土　　器

図版 7（2）

この土器は1号住居址より出土したもので，口縁部は内反し，胴部は筒形を呈する深鉢形の土器である。

口縁部は素文であり，口頸部には粘土紐を2本貼り付け，その間に粘土紐を横帯蛇行状に貼り付けている。突起状の貼り付けが3個施されている。胴部文様は斜走する沈線の上に粘土紐を長円形状に貼り付けてある。色調は黄茶褐色を呈し，焼成は中位である。曽利Ⅰ式に比定できうるであろう。

図版 7（3）

この把手は，2号住居址より出土したものである。把手の頂には，とぐろを巻き，開口した蛇が象徴化されている。

中央部には蛇行状の隆帯によって方形の区画を構成し，区画の中には縦走する沈線文が施されている。井戸尻Ⅱ式に比定できうるであろう。

図版 7（1）

この土器は3号住居址より出土したものである。口縁部は外反し，胴部が若干張り出す，小型深鉢である。胎土は長石を含み，色調は茶褐色を呈し，焼成は中位である。

口縁部文様は粘土紐を棒状と長円形状に交互に貼り付けている。胴部文様は櫛形文が主体となっている。隆帯に囲まれた部分には，沈線文が縦走している。

井戸尻Ⅲ式に比定できうるであろう。

図版 7（4）

この土器は4号住居址より出土したものである。口縁部はキャリパー形を呈し，胴部にふくらみをもった土器である。色調は茶褐色を呈し，胎土に長石を含み，焼成は中位である。

口縁部文様は，孔を持つ突起がつけられており。二条の平行沈線文がみられる。

突起から隆帯が垂下し，隆帯の上には刻目がある。胴部には渦巻状と英字状の隆帯があり，口縁部から胴部にかけて，縦走，斜走の沈線，あるいは蕨手状の文様によって区画され，その中に斜走する沈線文がみられる。

この土器は藤内式に比定できうるであろう。

1号住居址出土遺物　図版 8（1～20）

1は，雲母を含み，色調は黄褐色を呈し，隆帯が加飾され，その上に連続爪形文が施されている。（2～4）は口縁部破片である。いずれも外反している。3は，複合口縁である。いずれの土器片も雲母を含み，色調は2では薄黄褐色を呈し，3は茶褐色，4は黒褐色を呈している。（2～3）は半截竹管による平行沈線文が口縁部から胴部に垂下している。

4は，半截竹管による平行沈線文や，竹管状工具による刺突文が施されている。この工具は中空なものである。（5～6）は隆帯がつけられ，その上に指頭圧痕文のみられるもの。5は，茶褐色を呈し，無文地に半截竹管による沈線文が横走，斜走している。

6は，黒褐色を呈し，無文地に半截竹管による沈線文がみられる。1～6は，縄文中期初頭であろう。

7は茶褐色を呈し，区画文の発達が著るしく，区画された中には縄文がみられる。（8～9）は隆帯の上，隆帯の縁に爪形文のみられるもの。8は，茶褐色を呈し，雲母を含んでいる。隆帯によって方形に区画され，その中には，爪形文がみられる。9は，茶褐色を呈し，雲母を含んでいる。隆帯が瘤状に突起しており，隆帯によって区画された中には，半截竹管による沈線文がみられる。10は，外反する口縁部破片である。黄褐色を呈し，長石並びに雲母を含んでいる。口縁部文様は隆帯と刻目による横帯文が施されている。胴部文様は沈線文が施されている。(11～12）は櫛形文の発達がみられる。11は，赤褐色を呈し，長石を含んでいる。櫛形文を構成している隆帯に刻目がみられる。櫛形文の内部にはヘラによる沈線が施されている。12は，白褐色を呈し，ソウメン状の粘土紐の貼り付けによって櫛形文を構成している。

13は，台付土器であろう。赤褐色を呈し，石英，長石を含み，焼成は悪い。（7～13）は縄文中期中葉であろう。(14～15）は細い粘土紐の組み合わせによって，文様構成をしている。14は，黄褐色を呈し，口縁部破片であり，内反している。口縁部から胴部にかけてソウメン状の粘土紐を貼りつけている。縦状の粘土紐に横状の粘土紐を貼り付け梯子状の文様を構成している。15は，黒褐色を呈する。口縁部破片であり，内反する波状口縁である。粘土紐を同心円状に貼り付けている。(16～17）はキャリパー状の器形を呈する口縁部破片である。16は，黄褐

色を呈し，粘土紐による渦巻文は突起状を呈している。17は，黒褐色を呈し，口縁部文様は粘土紐による渦巻文がみられ，そよによって区画された中に沈線が斜走している。胴部文様は縄文地に蛇行状の沈線による懸垂文がみられる。(18～20) は縄文地に沈線による懸垂文がみられる。(18～20) は縄文地に沈線による懸垂文がみられるもの。18は，複合口縁であり，黄褐色を呈し，雲母を含み，焼成は良好である。19は，複合口縁であり，黒褐色を呈し，蛇行状の懸垂文がみられる。20は，黒褐色を呈し，刺突列点状の懸垂文がみられる。(14～20) は縄文中期後葉であろう。

2号住居址出土　図版 9（1～9）

（1～2）は半截竹管による平行沈線が縦走したり，横走して，地文を構成しているもの。1は，黒褐色を呈し，雲母を含み，地文に隆帯を加飾してある。2は，赤褐色を呈し，雲母を含んでいる。（1～2）は縄文中期初頭であろう。

（3～5）は隆線の発達がみられるもの，3は，赤褐色を呈し，長石を含む。隆線で区画された中に，半截竹管による沈線文が斜走している。4は，黄褐色を呈し，長石，雲母を含み，隆線の縁に沿って刺突文がみられる。（3～5）は縄文中期中葉であろう。5は，黒褐色を呈し，口縁部破片であり，内反している。ソウメン状の粘土紐を二重に貼り付けている。上の粘土紐は右から，左へ急角度で斜状に貼り付けてあり上のそれは左から右へ，なだらかな角度で貼りつけてある。

6は，茶褐色を呈し，隆線で区画された中や，そのまわりに沈線文がみられる。

（7～8）は口縁部破片であり，無文土器である。7は，内反し，8は，外反している。7は，黒褐色，8は，茶褐色を呈しいる。9は，底部破片であって，茶褐色を呈している。（6～9）は縄文中期後葉であろう。

3号住居址出土　図版 9（10～27）

(10～12) は半截竹管による平行沈線文がみられるもの。11，では隆帯を付け，その中に爪形状の刻目が施されている。色調は双方とも黄褐色を呈する。12は，黄褐色を呈し，隆線を縦横に付け，その縁に刻目が施されている。

(10～12) は縄文中期初頭であろう。

(13～14) は隆帯に刻目がつけられているもの。(13～14) は双方とも口縁部破片である。13は，茶褐色を呈し，口縁に沿って，一本隆帯が施され，その上に深い刻みがあり，その隆帯から，さらに無文の隆帯が垂下している。隆帯によって区画された中には，ヘラによる沈線文がみられる。14は，黄褐色を呈し，口縁部文様は隆帯によって，楕円文を形成し，その中を沈線でうずめている。胴部文様は粗い縄文がみられる。

15は，赤褐色を呈し，波状口縁である。波状の下には半円形につまみ状の貼り付けを有している。16は，黒褐色を呈し，蛇頭把手である。口縁部文様は斜縄文が主体となっている。17は，赤茶褐色を呈し，台付土器であろう。蛇がとぐろをまいた状態を象徴している。18は，黄褐色を呈し，蛇体状の隆帯が加飾されている。(13～18) は縄文中期中葉であろう。

19は黒褐色を呈し，口縁部文様はソウメン状の粘土紐を二重に貼り付けてあり，胴部文様は，斜縄文地に沈線による懸垂文が蛇行状に配されている。20は，黄褐色を呈し，突起状の口縁である。粘土紐貼り付けによる，文様構成をなしている (21～22) は口縁部破片である。粘土紐による横帯文によって文様構成がなされている。色調は，双方とも黒褐色を呈している。

23は，赤褐色を呈し，隆起蛇行状の懸垂文や縦走している沈線文がある。

(24～27) は把手，または突起などである。(24～25) は双方とも黄褐色を呈している。26は，茶褐色を呈し，刺突文が施されている。27は，黒褐色を呈し，粘土紐による渦巻文がみられる。(19～27) は縄文中期後葉であろう。

4号住居址出土　図版 10（1～8）

1は，赤黄褐色で雲母を含み，内反する口縁部破片である。口縁部から胴部にかけて，平行沈線文が垂下している。1は，縄文中期初頭であろう。

2は，茶褐色を呈し，雲母を多量に含んでいる，連続楕円文が主体を占め，その回りを抽象文的な刻目の文様がとりまいている。3は，赤茶褐色を呈し，雲母を含み，外反する口縁部破片である。口縁から弧状に隆帯があり，その上に刻目がみられ，隆帯の縁に，蛇行状に刻目がみられる。4は，茶褐色を呈し，雲母を含み，内反する口縁部破片である。横帯文が主体をしめており，二条の沈線の間に隆帯があり，その上に幅広く，深い刻目がある。さらにその下部には抽象文的な文様がみられる。5は，茶褐色を呈し，雲母を含み，隆帯状によって幾何学的な区画を構成し，蛇行状の隆帯もみられる。（2～5）は縄文中期中葉であろう。

6は，黄褐色を呈し，雲母を含み，把手の退化してきたものであろう。粘土紐を下段は横に，上段は縦に，二重に貼り付けてある。7は黄褐色を呈し，長石を含み，粘土紐によって渦巻文を構成している。8は，黒褐色を呈し，口縁部破片であり，内反している。雲母を含み，粘土紐を蛇行状は，貼り付けてある。（6～8）は縄文

中期後葉であろう。

5号住居址出土　図版 10（9～12）

（9～10）は粘土紐による横帯文が構成されているもの。9は，茶褐色を呈し，粘土紐が突起状をなしている。10は，茶褐色を呈し，粘土紐による区画の中に斜縄文がみられる。（11～12）は縄文地に懸垂文がみられるもの。11は，赤褐色，12は，黒褐色を呈する。（9～12）は縄文中期後葉であろう。

図版 10（13～19）

押型文土器（13～19）

これらは表面採集によるものである。

山形押型文（13）

陽刻面と陰刻面が1対1の割合で，施文されている。波長はゆるやかである。焼成は不良で，胎土中に雲母や長石を含んでいる。厚さは8mmほどである。

楕円押型文（14～19）

（14，15）は，施文帯が横位楕円文と，縦位楕円文に区分される。色調は黒褐色を呈し，焼成は中位であり，厚さは5mm位である。

（16，17）は，茶褐色を呈し，焼成は不良であり，16は厚さが1cmほどあり，厚手に属する。17は，厚さが6mmほどある。

18は黒褐色を呈し，焼成は不良であり，胎土中に長石の微片を含んでいる。厚さは5mmほどである。19は黄褐色を呈し，焼成は不良であり，厚さは7mmほどを示している。

第2節　石　　器

1．打　製　石　斧　図版 11（1～14）

春日社遺跡住居址より出土した打製石斧は全部で11点をかぞえる。図版中7～14は旧八幡社跡遺跡出土及び附近の表採である。石斧の形態としては短冊形を有するものが大半である。

8，9，14は撥形，13は乳棒状石斧である。4は打製石斧としては，特異な状態である。

石材としては硬砂岩のみである。

2．磨　製　石　斧　図版 12（15～20）

15～17，19は局部磨製石斧で片面のみ研磨されており，全て頭部を欠損している。石材としては15，19は緑色を程する蛇文岩であり，16は硬砂岩である。17は定角式の磨製石斧である。頭部と刃部が部分的に欠損しており，刃部は鋭角を程している。石材は蛇文岩である。18，20は乳棒状磨製石斧であるが，幾分定角状の形態を持つ。20は刃部を若干欠損しており，刃部は鋭角を程している。又，頭部にはフラットな面がみえ，若干の研磨が認められる。石材は硬砂岩である。18は頭部を欠損しており，石材は蛇文岩である。

3．大形打製石匙　図版 12（21～23）

中期の代表的な石器として，大形の打製石匙があるが，形態としては，横形と縦形の二つがある。21，23は横形，22は縦形である。21は自然面を残し，刃部に若干の剝離がみられる。22はつまみの上端にフラットな面がみられ，若干研磨されている。刃部は両面剝離である。23は両面剝離を施している。全体に，調製は粗製である。石材は全て硬砂岩である。

4．小型打製石匙　図版 12（25）

住居址より2点出土している共に横形である。24は刃部には両面きれいな剝離を施してあるが，つまみの下端には自然面を残している。石材は安山岩であるが，他の一点は黒耀石である。

5．石　　錘　図版 12（24）

小判形の扁平な硬砂岩を用い，両サイドを大きく打ち欠いている。若干胴部に研磨が認められる。

6．石　　鏃　図版 12（26，27）

住居址より三点出土しており，全て黒耀石である。26は正三角形を呈し，抉り込みは深い。27は二等辺三角形を呈し，脚の一部を欠損している。抉り込みは深い。共に調製は入念である。

7. 石　　錐　図版 12 (28)

住居址からは一点出土したのみである。石材は黒耀石で頭部を欠損しており，調製は入念ではない。

（小池　政美）

第V章　集　落　の　復　原

春日遺跡の範囲は 20,000m² の広域にわたる大遺跡と推定され，駒ヶ根市に於ける重要な遺跡の一つであるが，ここ拾数年前より開田工事が急速に行われたため，遺跡の大部分が破壊されてしまった。更に今回ほ場整備のため数少なくなった遺跡の中心部と考えられる箇所も破壊される運命となったので，残念ではあるが記録保存に踏切ったのである。

春日遺跡は，春日街道が南北に走る線上の段丘によって東西に二分されている遺跡で，その西側は，南八幡落北と，北側は源蔵川に挟れた舌状の台地である，東側は，段丘比高 3m 下に分布し，その東側は，青木田に続く平坦部の遺跡である。今回の調査は主に段丘の上下の 3 箇所を調査したのみで，遺跡全域の集落復原は不可能であるが，ほ場整備という予想以外の大破壊工事にあっては後日調査という機会を与えられない現状にあっては，遺物の散布状態及開田工事中の遺構発見を参考にして推定考察は許されないとしても，敢て集落の復原の参考になる資料を提供しておきたい。春日遺跡からは，稚蚕飼育所建設時に少なくも数箇の縄文式中期中葉の住居址が発見された。また青木田の南畑からは夥しい石器が発見されている。そのほか青木田から春日街道間は割合平坦であるため，住居址はまた破壊されない箇所も相当多いと考えられるところよりして，恐らく数拾箇以上にのぼる住居址群があると推測される。しかし，現在発見された住居址の埋設位置が地表下 80cm～1m 内外であるところよりして，割合平坦の地形であるため，或は破壊よりその一部は免がれることができれば幸いと思っている，今回迄発見されている竪穴住居址は 12 箇で，そのうち春日社跡の 6 箇の竪穴住居址の編年的位置については資料不足で分類できないので残念であるが，現在所蔵されている遺物からして，勝坂式と加曽利E式の縄文式中期中葉～後葉にかけてのものであることは確実である。

その外，今回発見された 1 ～ 6 号住居址の上層部より山形文，楕円文の土器が出土したが，これに関係をもつ遺構は発見でき得なかった。

春日遺跡B地点からは，土師後期，須恵器等が検出されたが遺構は発見されなかった。以上本遺跡からは，縄文早期中葉～中期，土師時代のそれぞれ時期を異にする集落の存在認め得ることができた，発見された石器，土器及び，余り時間差のない 6 箇にわたる復合住居址の問題点，尚今後検討されるべき余地を残していると考えられ，且つまた発掘データーの綿密な分折を必要とするので，ここでは前述の各調査員の記録をもととして，概略を述べるに止め，今後の詳細なる検討にまつこととした。

第Ⅵ章　八　幡　原　遺　跡

旧八幡社跡遺跡は，上穂沢遺跡の西方台地より八幡原部落に至る遺跡である。この遺跡は八幡原部落より会所附近と上の原の二箇所合せて八幡原遺跡と呼んでいる。昭和 28 年八幡原会所前道跡断面に縄文中期後葉の，竪穴式住居址 1 箇が発見された，特にこの附近は住宅地以外は殆ど水田化されていて調査困難な場所であるが，開田工事中焼土，石囲炉，石器，縄文中期土器等が発見された箇所であるところより，縄文中期の集落址であることは認められる事実である。然し集落の範囲は明らかでない。今回の調査では，八幡原会所東の畑及び南の三角畑の調査を行ったが，縄文式中期後葉の土器片，石器の多数検出はあったが，遺構は発見することはできなかった。

山伏塚，会所の東南 30m に山伏塚が昭和 28 年当時は現存したのであるが，何の時期か破壊されてしまった，発掘した人の話しでは何も出土しなかったという。

上の原は山伏塚より東東西 100m，南北 150m に亘る広範な地域に分布する遺跡で，今より拾数年前より開田工事が行われ殆ど水田化されて現在ではこれといって調査を行う箇所が得られないのであるが，段丘の形体よりして，遺跡全体が破壊されたとは思われないので，今後大規模のほ場整備工事が行われる折は特に注意して欲しい遺跡である。開田当時工事に立合った佐野氏は，縄文中期中葉～後葉にかけての竪穴住居址及び石囲炉を幾つか認めた，又，石器，土器も多量に拾集されている。この遺跡は南は上穂沢川方向にゆるやかな傾斜をして日当りのよい地形で，遺物も多く発見されている遺跡であることを忘れないようにしたいものである。

第Ⅶ章　ほ場整備の記録保存をおえて

昭和 45 年度太田切ほ場整備の記録保存をおえ不十分ではあるが，その責任を果すことができ感慨無量なものがある。

その一つは地下に埋まれた貴重な文化財を根こそぎ失ったという悲しみである。今回の記録保存は私達の目のとどく限りのものであって，おそらく目のとどかない遺構の方が数多かったと思われる。それらの遺構や遺物が何人の目にも触れずに破壊せられたことは，おしみても，おしみても余りあることである。

ほ場整備事業の予算の少ないという面もさることながら，狭い調査範囲なれば予備調査も可能であるが，ほ場整備という広域な水田に対して，遺跡的な可能性は認められても，精密分布調査を行なうことは現段階に於ては不可能である。こうした現状にあって，好むと好まざるとにかかわらず，工事が進められて行くところに，埋蔵文化財保護に対する問題点があると思う。ほ場整備という特殊な地形変更に対し，今後我々も，調査の有方に再検討をする必要に迫られていると思う。

春日地区の調査に於て，一箇所に6箇の復合住居址が認められたという事実。しかもあまり時間差の少ない時期での居住のあり方に対しても，今後詳細に遺物の検討の上，一時期の住居或いは改築の有方を検討したい。

今回ほ場整備埋蔵文化財の調査にあたって，駒ケ根市教育委員会，南信土地改良事務所係員，特に小池博物館長，福沢館長補佐を中心に博物館専任学芸員下村忠比古氏，県社会教育課，金井，今村，神村，桐原指導主事，木下平八郎，遮那藤麻呂，小池政美，吉村進調査員，地元関係者の熱意には深甚な感謝をささげる次第である。

（友野　良一）

第Ⅰ次調査

注 1. 鳥居竜蔵「先史及原始時代の上伊那」上伊那教育会，大正13年
2. 大場磐雄，友野良一「伊那村遺跡第一次調査概報」伊那村遺跡保存会，昭和26年
3. 大場磐雄，友野良一「伊那村遺跡第二次調査概報」伊那村遺跡保存会，昭和27年
4. 平出遺跡調査会編「平出」昭和30年
5. 河出書房「日本考古学講座」昭和31年
6. 長野県教育委員会「上原」昭和32年
7. 宮坂英弐「尖石」昭和32年
8. 市村咸人「下伊那郡誌第三巻」下伊那誌刊行会，昭和40年
9. 河出書房新社「日本の考古学」昭和40年
10. 藤森栄一「井戸尻」昭和41年
11. 第一生命保険相互会社「金子台遺跡の縄文時代墓地」昭和41年
12. 上伊那誌刊行会「上伊那郡誌」昭和42年
13. 水野正好「環状石籬群の意味するもの」昭和43年
14. 武藤雄六「長野県富士見町籠畑遺跡の調査」昭和43年
15. 八幡一郎「日本文化のあけぼの」昭和43年
16. 富士写真フイルム株式会社「馬場遺跡の縄文時代配石遺構」昭和44年
17. 伊那市教育委員会「月見松遺跡緊急発掘調査報告書」昭和44年
18. 長野県考古学会「有明山社」昭和45年
19. 茅野市教育委員会「茅野和田遺跡」昭和45年

第Ⅱ次調査

注 1. 平出遺跡調査会編「平出」昭和30年
2. 宮坂英弐「尖石」昭和32年
3. 河出書房新社「日本の考古学」昭和40年
4. 藤森栄一「井戸尻」昭和41年
5. 上伊那誌刊行会「上伊那誌」昭和42年
6. 伊那市教育委員会「月見松遺跡緊急発掘調査報告書」昭和44年
7. 茅野市教育委員会「茅野和田遺跡」昭和45年

県営ほ場整備事業大田切地区（昭和45年度分）
第1次・第2次埋蔵文化財緊急発掘調査

藤助畑・春日
—緊急発掘調査報告—

昭和46年3月15日 印刷
昭和46年3月20日 発行 （非売品）

編集者 友野良一

発行所 駒ケ根市赤穂10780番地の2
駒ケ根市教育委員会

印刷所 岡谷市川岸108番地
中央印刷株式会社